

福音メッセージ集

# 新しい天地と 古い天地

重田定義



新しい天地と  
古い天地

重田定義



## 目次

はじめに	5
一 サタンを踏み砕くキリスト	9
二 人の望みと神から来る希望	27
三 「わたしに「つまずかない者は幸いです」	43
四 心に書かれた肩書	63
五 新しい天地と古い天地	79
六 神の選びに与かる者	99
七 遺伝子の修復と霊の修復	117
八 オリーブ油のつぼ一つ	135
九 報われる忍耐	149
十 いのち長き時代に生きるために最も必要なこと	169



## はじめに

このたび「新しい天地と古い天地」と題する福音メッセージ集を出版することになりました。

今年元日の某新聞の社説の中に、「コンピュータ革命が急速に進んだこの世紀末、歴史の加速はこの百年で何十万倍にもなったというべきではないだろうか、実際、最近の社会変動は加速が著しい。だれもがこのめまぐるしい変化に流され、おぼれ、戸惑っている。政治も国民も次から次に生まれる事態に対応しきれないうちに、また状況は変わる。そして、半年先さえだれも的確には見通せない」とありました。

この社説に指摘されるまでもなく、私たちは世界や日本の中で次々と起こるさまざまな混乱した政治的、経済的、社会的なできごとを通して、歴史の進行が人の力で止めることのできない急激な速度で、どこか先の見通しも利かない、考えも及ばない終点に向かって、地球上の人々すべてに深く関わりながら年々加速していることを、自分のからだで感じ取

っているのではないのでしょうか。

英語でヒストリー（歴史）という言葉は、ヒズ・ストーリーの合成語ですが、ヒズとは「神様の」という意味ですから、歴史は「神様の語られたこと」ということになります。したがって、歴史は人間が進めるものではなく、神様のお考えによつて今までも、またこれから進行するものなであります。そして歴史には初めがあるように終わりもあるのですから、その歴史がどんどん加速しているということは、とりもなおさず神様が歴史を加速しておられるということ、神様が終わりを速めようとしておられるということであり  
ます。

では神様はどのようなお考えで歴史を加速しておられるのでしょうか、終わりを速めようとされるのでしょうか。その答えは、神様のみことばである聖書だけにあります。しかし、私たちがいくら聖書を読んでも自分の知恵で理解しようとすると限り、神様の深いお考えを知ることではできません。ただ私たちが謙虚になつて神様の前にへり下り、みこころを示してくださいと心から祈り求めて聖書をひもどくとき、はじめて神様は私たちの心の目を開いてくださり、なぜご自分のご計画を速めておられるのか、どこに向かつて歴史は進んでいるのか、また今このときに私たちはどうすればよいのかを教えてくださいます。

はじめに

この福音メッセージ集には、聖書のみことばを通して、まことにして唯一の神である創造主なる神様、御子イエス様はどのように私たちを愛してやまない方であるか、また、このような今の時代に私たちは何を最も大切に考え、どう生きるべきかなど、おひとりでも多くの方に知っていただきたいという願いを込めて取り次がせていただいた十篇のメッセージが収められています。いずれも各地のキリスト集会や家庭集会でお話ししたメッセージの中から選んだものですが、お読みになって、聖書の同じ箇所が何度か出て来たり、同じような説明が何度か繰り返されていることに気づかれると思います。しかし、このような箇所は、神様が私たちに語ってくださっている重要なメッセージですから、どうかそのことに心を留めていただきたいと思えます。

どうかこの本をお読みになったおひとりおひとりが、この本を通して神様の恵みと愛そのものであるイエス様に出会われて、イエス様の救いのみわざをご自分のものとしてお受け入れになりますように、また神様が大いなるご計画をもって進めておられる歴史の中の日々を、神様が約束してくださっている確実な希望と将来に向かって、イエス様に従うまことの喜びと平安と希望をもって過ごすことがおできになるようにと心からお祈り致します。

最後に、主にあつて表紙および見出しに美しい花の絵を描いてくださった吉屋真二兄弟に心から感謝致します。また、この本について終始協力し、祈ってくれた妻都代子に感謝します。

一九九八年七月

重田定義

## 一 サタンを踏み砕くキリスト

わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。彼は、おまえの頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかとかみつく。

(創世記3章15節)

今日は、イエス様がなぜ神の御子でありながら、この地上まで降りて来てくださったのか、という聖書の最大のテーマについて、みことばを引きながらごいっしょに考えてみたいと思います。

### 原罪

このことを考えるとき、まず人間の原罪、すなわちどんな人間であっても生まれつき持っている罪の性質について考えなければなりません。

神様は、万物を創造なさり、創造の最後にご自分と交わり、ご自分に仕えるものとして、ご自分に似るように人間をお造りになりました。

神は、「われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。そして彼らに、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配させよう。」と仰せられた。神は、このように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。

(創世記1章26～27節)

神様が「われわれ」というように複数形でご自分を指しておられることを不思議に思われる方も多いと思いますが、このことよって世のはじめから、父なる神と子なる神が存在していることがわかります。神様はご自分に似るものとして最初の人アダムとその妻エバをお造りになり、彼らをエデンの園に置き、園の管理をお任せになりました。そのとき神様は次に彼らにお命じになりました。

神である主は、人に命じて仰せられた。「あなたは、園のどの木からでも思いのままに食べてよい。しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ。」

しかし、エバはサタンの化身である蛇の誘惑に負けて、神様が「食べてはいけない、食べれば必ず死ぬ」と言われていた善悪の木に実った実を食べてしまった上、アダムにもそれを食べるように勧めた結果、アダムも食べてしまいました。アダムとエバはそれまで自分たちで善悪の判断をする必要はありませんでした。いつも神様に顔を向けて、神様の指示に従っていたので、ふたりは完全に罪から守られていたのです。しかし、彼らは善悪の知識の木の実を食べることによって、神様に逆らい、神様に背を向けて、自分自身で善悪を判断するようになってしまいました。これは自分も神のようになりたいということ在意味します。神様の命令に従わず、神様を無視して自分で神を演じることこそ罪であります。しかもこのことは、最初の人アダムとエバが神様に対する背きの罪を犯しただけにとどまらず、彼らの罪の遺伝子は子孫であるすべての人間に受け継がれ、その結果すべての人間は生れながら罪の性質を持つようになり、その罪のためにすべての人間は神様が警告なさった通り、必ず死ななければならなくなったのです。これが「原罪」と呼ばれるものです。したがってこの生まれながら人間に受け継がれた罪を、自分の努力で取り去ることは決してできません。この罪はただ神様の一方的なあわれみと恵みによって、私たちをその

罪から救い出すために私たちと同じように血と肉を持ってこの世に来てくださった神の御子イエス・キリストの十字架上で贖いのみわざによってのみ、取り除くことができるのです。パウロがローマ人への手紙の中で言っているのはこのことです。

すべての人は、罪を犯したので、神からの榮譽を受けることができず、ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、働なしに義と認められるのです。神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現わすためです。というのは、今までに犯されて来た罪を神の忍耐をもって見のがして来られたからです。それは、今の時にご自身の義を現わすためであり、こうして神ご自身が義であり、また、イエスを信じる者を義とお認めになるためなのです。

(ローマ人への手紙3章23〜26節)

このようなイエス・キリストの尊い犠牲の死がなければ、私たちが生まれながらの罪から救い出されることはありませんでした。

### 福音予告についての最初の記述

そこで、聖書の多くの箇所では預言されている、この救いのご計画の中から、いちばん最初の原型、すなわち原福音と呼ばれ、聖書のはじめの部分にはつきりと記されている人類の救いのご計画について、ごいっしょに考えてみたいと思います。

冒頭に挙げた創世記三章十五節のみことばは、その前後の文章の脈絡から、神様がエバを誘惑した蛇に仰せになったものであることはわかります。しかし、神様がおっしゃったこのみことばが何を意味しているのかは、ただ読んだだけではわかりません。

まして、神様が仰せになったこのみことばにイエス・キリストの福音が予告されているということは、人間の知恵では知ることができません。このみことばを含め神様のみことばの深い意味を知るためには、パウロが言っているように、神の知恵による御霊の説き明かしが必要であります。

まさしく、聖書に書いてあるとおりです。「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。」神はこれを、御霊に

よって私たちに啓示されたのです。御霊はすべてのことを探り、神の深みにまで及ばれるからです。いったい、人の心のことは、その人のうちにある霊のほかに、だれが知っているでしょう。同じように、神のみこころのことは、神の御霊のほかにだれも知りません。ところで、私たちは、この世の霊を受けたのではなく、神の御霊を受けました。それは、恵みによって神から私たちに賜ったものを、私たちが知るためです。

(コリント人への手紙第一 2章9〜12節)

ですから、これから御霊に導かれつつ、ごいっしょにこのみことばの意味について考えて行きたいと思えます。

### 「蛇」について

まず、エバを誘惑した蛇とは何を意味するのでしょうか。聖書の最後に収められているヨハネの黙示録の中に、

こうして、この巨大な竜、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれて、全世界を惑わす、あの古い蛇は投げ落とされた。

と記されている蛇は、エバを誘惑した蛇と同一のものです。では、サタン、あるいは悪魔とはいったい何者なのでしょう。

悪魔、サタンは墮落した天使であると聖書に記されています。

暁の子、明けの明星よ。どうしてあなたは天から落ちたのか。国々を打ち破った者よ。どうしてあなたは地に切り倒されたのか。あなたは心の中で言った。「私は天に上ろう。神の星々のはるか上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山にすわろう。密雲の頂きに上り、いと高き方のようになろう。」しかし、あなたはよみに落とされ、穴の底に落とされる。

(イザヤ書14章12〜15節)

神様に仕える者として造られた天使が、自分に与えられた力を過信して、「いと高き方」すなわち神に等しくなろうという高慢な思いを抱いたために、神様から御使いの位を剝奪され天国から落とされたのがサタンであります。

したがってサタンは神様を憎み、神様に逆らい、この世の神、暗闇の世界の支配者として人間を惑わし、人間の欲望を利用して神様に背かせるようにあらゆる機会をねらって人

間をそそのかします。また罪を犯した人間を神様に訴え、人間が自分の罪に気づかないままに罪を犯し続け、そして死に怯えることを唯一の喜びとします。サタンは人間にとつてそのような恐ろしい存在なのです。

「おまえの子孫」とは

このサタンに思いのままにあやつられている人間は、悪魔に属する者、悪魔から出た悪魔の子どもと言つてもよいのではないでしょうか。聖書には次のように記されています。

罪のうちを歩む者は、悪魔から出た者です。悪魔は初めから罪を犯しているからです。

(ヨハネの手紙第一 3章8節)

冒頭のみことばの中で、神様が「おまえの子孫」と仰せになつてゐるのは、このように自分では気づかないのですが、サタンに属し支配されるサタンの子どもとして、欲望のおもむくままに自分の思いを第一とし、神様に背く罪の中に生きてゐる人間のことです。

「女の子孫」とは

次に神様が仰せられた「女の子孫」とはだれのことかを考えてみましょう。「女の子孫」とはイエス・キリストを指しておられるのです。なぜでしょうか。それはイエス・キリストの誕生を見ればわかります。聖書には次のように記されているからです。

イエス・キリストの誕生は次のようであった。その母マリヤはヨセフの妻と決まっていたが、ふたりがまだいっしょにならないうちに、聖霊によって身重になったことがわかった。夫のヨセフは正しい人であつて、彼女をさらし者にはしたくなかつたので、内密に去らせようと決めた。彼がこのことを思い巡らしていたとき、主の使いが夢に現われて言った。「ダビデの子ヨセフ。恐れないうあなたに妻マリヤを迎えなさい。その胎に宿っているものは聖霊によるのです。マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救つてくださる方です。」このすべての出来事は、主が預言者を通して言われた事が成就するためであった。「見よ、処女がみごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」(訳すと、神は私たちとともにおられる、という意

味である。)ヨセフは眠りからさめ、主の使いに命じられたとおりにして、その妻を迎え入れ、そして、子どもが生まれるまで彼女を知ることがなく、その子どもの名をイエスとつけた。

(マタイの福音書1章18〜25節)

神様がイエス・キリストを「女の子孫」と言われたのは、このように、イエス様が聖霊によって処女マリヤからお生まれになるということを予告されるためでした。

「おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く」とは

「おまえの子孫」が、この世の支配者サタンに属する者であり、「女の子孫」が神の御子が人となってこの世においてになったイエス・キリストであれば、この両者の間には対立があるのは当然です。イエス様は弟子たちに次のようにおっしゃっています。

もし世があなたがたを憎むなら、世はあなたがたよりもわたしを先に憎んだことを知っておきなさい。もしあなたがたがこの世のものであったなら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではなく、かえってわたしが世からあなたがたを選び出したのです。それで世はあなたがたを憎むのです。

「世」とはサタンおよびサタンの支配下にあるこの世を愛する人々ですから、彼らは御子イエス様を拒否します。したがってイエス様によってこの世から救い出されて神の側に付く者、「天」に属するものとされた者をも拒否するのです。

「彼はおまえの頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかとかみつく」とは

私たちは御霊の助けによって、創世記三章十五節のみことばの意味について、ここまで知ることができました。引き続き「彼はおまえの頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかとかみつく」というみことばについて、御霊による説き明かしを求めて行きたいと思えます。まず「彼はおまえの頭を踏み砕き」というみことばは何を意味するのでしょうか。「彼」とは御子イエス・キリストを指し、「おまえ」はサタンを指すということはわかります。ではイエス様がサタンの頭を踏み砕くとはどういう意味でしょうか。それはイエス様がサタンを滅ぼされるということを意味しています。聖書の最後のところには神の御子イエス様がサタンの支配下にある罪に汚れたこの世界を終わらせて、新しい聖い世界を造られることを預言しているヨハネの黙示録が収められていますが、この中に、サタンに対する刑

(ヨハネの福音書15章18～19節)

罰、サタンの最後が記されています。

また私は、御使いが底知れぬ所のかぎと大きな鎖とを手を持って、天から下つて来るのを見た。彼は、悪魔でありサタンである竜、あの古い蛇を捕らえ、これを千年の間縛つて、底知れぬ所に投げ込んで、そこを閉じ、その上に封印して、千年の終わるまでは、それが諸国の民を惑わすことのないようにした。

(ヨハネの黙示録20章1〜3節)

しかし千年の終わりに、サタンはその牢から解き放され、地の四方にある諸国の民、すなわち、ゴグとマゴグを惑わすために出て行き、戦いのために彼らを招集する。彼らの数は海辺の砂のようである。彼らは、地上の広い平地に上つて来て、聖徒たちの陣営と愛された都とを取り囲んだ。すると、天から火が降つて来て、彼らを焼き尽くした。そして、彼らを惑わした悪魔は火と硫黄との池に投げ込まれた。

(ヨハネの黙示録20章7〜10節)

こうしてエバを誘惑して神に対する背きの罪を犯させたサタンと、そのサタンに惑わされて神様が遣わされた御子イエス様に最後まで反抗した人々は最後には滅ぼされるのです。では、次に続く「おまえは、彼のかかとかみつく」とはどういう意味なのでしょうか。

だれでも蛇にかかるとを噛みつかれれば、痛みで、立つことも歩くこともできなくなるでしょう。ましてそれが毒蛇であれば命にも関わることになります。

しかし、神様はサタンにイエス様をそのような痛み、苦しみに遭わせることをお許しになつて居るのです。なぜでしょうか。それは私たち人間を罪から救い出してくださるためなのです。神様はサタンに惑わされて神様に背きの罪を犯したアダムとエバの子孫である私たち人間に代わってイエス様に死の苦しみをお与えになったのです。したがって、「おまえは、彼のかかるとにかみつく」とはイエス・キリストの十字架を意味します。聖書には神が人となられ、蛇に誘惑されて神様の命令に背いた人間の罪を贖うために、十字架にお架かりになり死んでくださったことが次のように記されています。

キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができずとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。

(ピリピ人への手紙2章6～8節)

キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。

ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。

(ペテロの手紙第一 2章22～24節)

もちろん、イエス様は十字架の上で死んでくださっただけではなく、サタンの頭を完全に踏み砕いて、サタンの最大の武器である死に対する完全な勝利を現わすために復活してください、ご自分に属する者に永遠のいのちを与えてくださったのです。パウロはこのことについて次のように言っています。

今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。というのは、死がひとりの人を通して来たように、死者の復活もひとりの人を通して来たからです。すなわち、アダムにあつてすべての人が死んでいるように、キリストによつてすべての人が生かされるからです。

(コリント人への手紙第一 15章20～22節)

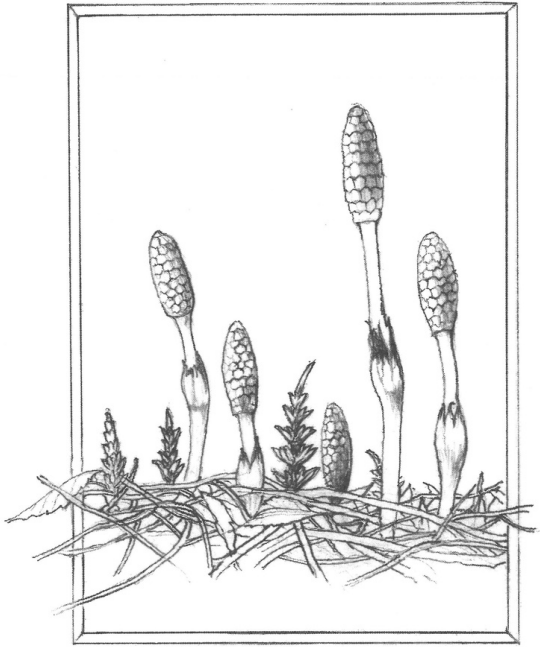
さて、これまで私たちはごいっしょに創世記三章十五節の神様のみことばについて考

て来ましたが、このみことばの意味を単に人間を誘惑したサタンとそのサタンを懲らしめるためのイエス・キリストの戦いというように理解するだけでは、ここに隠された神様のみこころがまったくわからないこととなります。けれども、もし私たちが聖霊に導かれてこのみことばを味わうならば、神様に対する自分の大きく深い罪が示され、御子イエス・キリストが十字架の上で死の苦しみを受けられたのは、ほかならぬこの自分を恐ろしい永遠の滅びから救い出してくださいるためであったことを知ります。そしてまた自分の罪を心から悔い改め、イエス様を救い主として信じ受け入れるだけで罪が完全に聖められ、神様に義と認められることを知って、神様の前から感謝をささげることができるのです。

冒頭の神様のみことばは「原福音」であると申しましたが、神様は人類最初の人間アダムとエバがサタンの誘惑に負けて罪を犯したときに、すでに私たちを罪から救うためのご計画を御子イエス・キリストによってこのように約束されていたということは、何と云う深い神の愛でありましょうか。この考えられないような神様と御子イエス様の愛と恵みに対して私たちがお応えするには、ただ御子イエス様を救い主として信じるだけでなく、信じる者の中に住んでくださっているイエス様から目を離すことなく、イエス様にしっかりと結びついて生きることではないでしょうか。

主が私たちのために死んでくださったのは、私たちが、目ざめていても、眠っていても、主とともに生きるためです。

(テサロニケ人への手紙第一 5章10節)



ツクシ



## 二 人の望みと神から来る希望

聖書はこう言っています。「彼に信頼する者は、失望させられることがない。」

(ローマ人への手紙10章11節)

今日は「彼」、すなわち主イエス様に信頼する人は失望させられることがない、というすばらしいみことばから、人間の願望と神様から与えられる希望には天地の差があるという問題について考えてみたいと思います。

### 人間の抱く望み

私たち人間はだれでも願望を持っています。私たちには、いろいろな望みがあります。たとえば昔の人は「無病、息災」あるいは「家内安全、商売繁盛」という願望を祈りに込めていましたが、今日でも人は同様な願望、すなわち豊かな生活、家族の安全、健康な

らだ、立派な名譽、高い地位、大きな権力などを望みます。しかし私たちはその望みがしばしば失望に、さらに失望が絶望に変わることが多いことを体験します。またこのように目に見える望みだけでなく、私たちはもつと内面的なもの、たとえば安らぎ、信頼、愛などを望みます。聖書にも、

人の望むものは、人の変わらぬ愛である。

(箴言19章22節)

とあります。私たちは変わらぬ愛を望みます。変わらぬ信頼を望みます。変わらぬ安らぎを望みます。けれどもよくよく考えてみると、永遠に変わらないもの、永遠に不動のものはいくら探してもないのではないでしょうか。すべてのものがうつろい行くものであるならば、そのようなものに望みを託しても空しさを覚えるだけではないでしょうか。聖書は次のように言っています。

富を得ようと苦労してはならない。自分の悟りによつて、これをやめよ。あなたがこれに目を留めると、それはもうないではないか。富は必ず翼をつけて、わしのように天へ飛んで行く。

(箴言23章4～5節)

二 人の望みと神から来る希望

富とは金銭的な財産に限りません。先ほど挙げた健康、名誉、地位、権力、あるいは良き家庭なども富です。しかし、聖書では人間が最も持ちたいと望む、これらの富は翼をつけて飛んで行ってしまふものであり、その富にのみ望みを抱いて、それを追い求めても結局失望することになると言っているのです。また詩篇には次のようなダビデの詩が記されています。

私が信頼し、私のパンを食べた親しい友までが、私にそむいて、かかとを上げた。

(詩篇41篇9節)

ともにパンをわかち合うほどの親しい、信頼した友人までが自分を裏切ったという、悲しい詩であります。信頼している親友でさえも自分が不利と判断したときには裏切るような、人間はまことに自己中心な悲しい存在なのであります。ダビデはまた次のような詩も詠んでいます。

そしりが私の心を打ち砕き、私は、ひどく病んでいます。私は同情者を待ち望みましたが、ひとりもいません。慰める者を待ち望みましたが、見つめることはできませんでした。

(詩篇69篇20節)

けなされたり、あざけられたりして悲しみ悩んでいるときに、自分を慰める者や同情者を望んでも見つからなかったと言うのであります。そればかりか自分の親しい者さえも、かえって病んでいる自分を避けて遠くに立っているだけだとダビデは嘆いています。私の愛する者や私の友も、私のえやみを避けて立ち、私の近親の者も遠く離れて立っています。

(詩篇38篇11節)

困ったとき、苦しみ悩んだとき、この人こそ自分が信頼できる人と望みを抱いて、人に寄りかかろうとしても、その人はすつと身を引いてしまうという体験は私たちにもあるのではないのでしょうか。人間が人に抱く望みとはこのようなものであります。ヨブ記には次のような箇所があります。

神を敬わない者の望みは消えうせる。その確信は、くもの糸、その信頼は、くもの巣だ。彼が自分の家に寄りかかると、家はそれに耐えきれない。これにすがりつくと、それはもちこたえない。

(ヨブ記8章13〜15節)

「神を敬わない者」とは、神などいないとうそぶく者、この世のことだけに目を留めて

二 人の望みと神から来る希望

生きている者すべてであります。そしてそのような者の望みや信頼は、ちようどくもの糸、くもの巢のようにはかなく、切れやすいものであると言っているのです。まことに私たちが肉の目で求める望み、この地上のものに置く望みはどれもくもの糸のような、触れれば消えてしまうようなはかないものばかりではないでしょうか。それを知ったとき私たちは絶望するしかありません。

自分の望みに絶望したときに、はじめてまことの望みを知る

しかし、まさに私たちが自分の抱いた望みに絶望したそのときに、神様はまことの望みを与えてくださるのです。神様はその機会をとらえて、絶望した私たちに御霊を送ってください、私たちの閉ざされていた霊の目を開いて、まことのたしかな望みがあるということを見せてくださるだけでなく、心からそのまことの望みを求める者には、だれにでも喜んで与えてくださるのであります。したがって絶望も私たちがたくな心を砕いてくださるために神様が与えてくださる恵みであると言いうことができます。

## まことの望みとは神ご自身

では神様が与えてくださるまことの望みとは何でしょうか。それは神様ご自身であり、まこと、神様こそがまことのたしかな望みなのであります。ダビデは人生のはかなさを知って、次のように祈っています。

主よ。お知らせください。私の終わり、私の齢が、どれだけなのか。私が、どんなに、はかないかを知ることができるよう。ご覧ください。あなたは私の日を手幅ほどにされました。私の一生は、あなたの前では、ないのも同然です。まことに、人はみな、盛んなときでも、全くむなしいものです。まことに、人は幻のように歩き回り、まことに、彼らはむなく立ち騒ぎます。人は、積みたくわえるが、だれがそれを集めるのか知りません。主よ。今、私は何を待ち望みましよう。私の望み、それはあなたです。

(詩篇39篇4〜7節)

ダビデは自分の残された生涯が残り少なくなったことを知ったとき、人生は何と空しく人生の労苦は無意味で、人間はただ空しく立ち騒いでいるに過ぎない者であるということ

## 二 人の望みと神から来る希望

を悟りました。そして、まことの望みはそのような一時的な空しいものではなく、神様がそがまことの望みであるという告白をすることができたのであります。

しかしなぜ神様が私たちのまことの望みなのでしょう。それは全能の神であり、創造の神であり、永遠に生きておられる神であり、すべてのものを支配しておられるまことの神様だけが、ご自分に背いた罪の結果として、たしかな望みもなく暗闇の中に生きている私たちを見捨てずに、なお愛してくださいなさっているからであります。そのことのたしかな証明として、神様はご自分のひとり子イエス様を私たちのもとに遣わしてくださいました。

そしてこの御子イエス様が、私たちの罪を身代わりに負って十字架の上で死んでくださり三日後によみがえってくださいさったことよって、私たちは自分ではどうすることもできない罪の束縛から完全に解放されただけではなく、神様から義と認められ、神様の子どもとして永遠のいのちと天国を相続する権利を無代価で与えられたのです。私たち人間が望むべくもない、このようなまことの望みを与えてくださった神様について、ペテロは次のように言っています。

私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神は、ご自身の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられた

ことよつて、私たちを新しく生まれさせて、生ける望みを持つようになしてくださいました。また、朽ちることも汚れることも、消えて行くこともない資産を受け継ぐようにしてくださいました。これはあなたがたのために、天にたくわえられているのです。

(ペテロの手紙第一 一章3〜4節)

### 生ける望み

イエス様を信じた者の望みは、信じる以前に抱いていた地上に蓄える資産を持ちたいという、朽ちる、汚れた、いのちのない望みから、すでに天に蓄えられている朽ちることも汚れることもない永遠の資産を受け継ぐことができるという、永遠のいのちの望み、たしかに生ける望みに変えられます。

このように御子イエス様を信じることよつて、たしかに生ける望みを与えられた者のそれからの地上の日々の歩みはどのように変わるのでしょうか。イエス様を信じ、生ける望みを持つことができた者がこの世に置かれている状況は、依然として信じる前と変わらないように見えることが少なくありません。しかし、生ける望みを与えられる以前は耐え

## 二 人の望みと神から来る希望

られなかったような状況に置かれても、人から見ればとうてい耐えられないのではないかと思われるような状況に置かれても、ひとたび生ける望みを持たば不思議とそのような状況にも耐えられるようになるのであります。もつとも、耐えられるようになると言つても自分の力によつて耐えることはできません。そうではなく、信じる者の中に住んでくださつてゐるイエス様が支えてくださり、励ましてくださり、希望を与えてくださるので、そのイエス様に拠り頼むことによつて力が与えられ、たしかな希望を持つて耐えることができるのであります。

パウロは復活されたイエス様に出会つてから後霊の目が開かれて、それまで自分のしてゐることは正しいと信じてイエス様を信じた人々を迫害し続けて来たことがたいへんな過ちであつたことを知り心から悔い改めました。そして、それからはイエス様を伝える器として大きな働きをするようになりましたが、そのために彼は何回も死ぬような苦しみに会うことになりました。しかしパウロはこの苦しみについて次のように言うことができました。

兄弟たちよ。私たちがアジアで会つた苦しみについて、ぜひ知っておいてください。私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、ついにいのちさえも危うくなり、ほんとうに、自分の心の中で死を覚悟しました。これは、もはや自

分自身を頼まず、死者をよみがえらせてくださる神により頼む者となるためでした。ところが神は、これほどの大きな死の危険から、私たちを救い出してくださいました。また将来も救い出してくださいます。なおも救い出してくださいという望みを、私たちはこの神に置いているのです。

(コリント人への手紙第二 1章8-10節)

このようにパウロが自分の力に抛り頼むのではなく神様に心から信頼したときに、神様はパウロに対して死の危険から今までだけでなく将来も救い出されるという、たしかな希望を与えてくださったので、彼はその神様の力によって耐えられないような苦しみにも耐えることができたのであります。私たちは、これはパウロのような信仰の強い人だからできることだと思いがちであります。しかしそのような考えは見当はずれであります。もちろん私たちの信仰はたいへんに弱く、パウロの信仰には及びもつきません。しかし私たちの中に住んでくださっているイエス様にただ心から抛り頼めば、私たちもパウロと同じたしかな望みを持つことができますのです。

見えるものではなく、見えないものに望みを抱く

父なる神様はイエス様を信じる者を、ご自分の子として扱われます。そして父親である神様は愛する子どもをご自分の子どもにふさわしいように訓練されます。パウロもその訓練を受けたのです。ですからパウロは苦難のときも、これを父なる神の愛による訓練として受け止めることができました。

「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」訓練と思つて耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるでしょうか。

(へブル人への手紙12章5〜7節)

ですから、私たちは勇気を失いません。たとい私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないも

のはいつまでも続くからです。

(コリント人への手紙第二 4章16〜18節)

神様のあわれみにより、イエス様によって霊の目が開かれた私たちは、先ほど挙げたこの世の富のような目に見えるものは一時的なものであることを知りました。そして見えるものに目を留め、そこに望みを置くのではなく、肉の目には見えませんが永遠なるものに希望を持つことができました。ですからパウロが言っているように、たとえ苦難に遭って肉体は衰えても、霊はますます強められることを喜び、また今の患難も将来もたらされる永遠の栄光に比べれば取るに足りないほど軽いものとして、勇気をもって耐え忍ぶことができるように変えられるのであります。

望みはただ主にあり

イエス様を信じた者が自分をイエス様にお任せすることができるのは、イエス様ご自分のいのちを捨ててまでも愛してください、自分の信仰を、いや自分のいのちを、イエス様にお目にかかる日までしっかり守ってくださいる方であることをよく知っているからです。イエス様は次のようにおっしゃいました。

## 二 人の望みと神から来る希望

父がわたしにお与えになる者はみな、わたしのところに来ます。そしてわたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。わたしが天から下って来たのは、自分のところを行なうためではなく、わたしを遣わした方のみところを行なうためです。わたしを遣わした方のみところは、わたしに与えてくださったすべての者を、わたしがひとりも失うことなく、ひとりひとりを終わりの日によりみがえらせることです。事実、わたしの父のみところは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持つことです。わたしはその人たちをひとりひとり終わりの日によりみがえらせます。

(ヨハネの福音書 6 章 37～40 節)

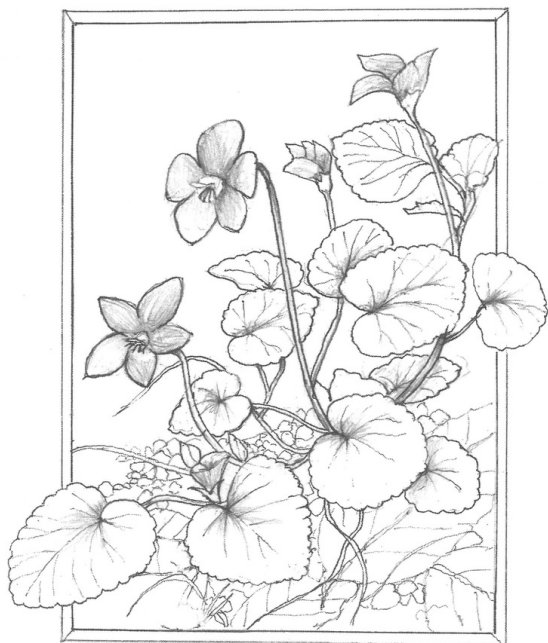
ここで、イエス様はご自分を信じ永遠のいのちを持つ人々を迎えに天から下りて来られるその日に、それらの人々のからだをご自分の復活のからだと同じ朽ちないからだによりみがえらせてくださると二回も繰り返し返して約束しておられます。私たちはこのイエス様にたしかな望みを抱いて、その日の一日も早く来ることを待ち望んでいるのであります。聖歌の二百三十六番には次のような歌詞があります。

望みはただ主の血と義にあるのみ。いかでか他のもの頼りとなすべき。イエスこそ岩なれ、堅固なる岩なれ。ほかは砂地なり。

御誓い頼めば大水も恐れじ。ものみな消ゆとも望みは主にあり。イエスコそ岩なれ、堅固なる岩なれ。ほかは砂地なり。

ラッパの音響く日、義の衣よびまといて。恐れず御前にこの身は立つを得ん。イエスコそ岩なれ、堅固なる岩なれ。ほかは砂地なり。

この聖歌の歌詞のように、神の御子が人となられたイエス様以外のどんなものに頼つても、望みを持つても、それらは所詮しよせん砂地のようなものであり、そのような望みは砂地に跡形もなく吸い込まれ消えてしまいます。しかし、イエス様は神様から遣わされた堅固な岩であります。このイエス様に頼り、イエス様に望みをかける者は、冒頭のみことばの通り決して失望させられることがないのであります。どんなに人生の嵐が吹き荒んでも、イエス様が堅固な岩のようにしっかりと守ってください、支えてください、庇ってください、やがて神様の御前に立つ日にも恐れることなく御前に立たせてくださるからであります。どうかひとりでも多くの方が、この世の空しくはない望みを捨てて、神様が与えてくださったまことの望みであるイエス様をご自分の望みとなさることが出来ますように、心からお祈り致します。



スマイレ



### 三 「わたしにつまづかない者は幸いです」

さて、獄中でキリストのみわざについて聞いたヨハネは、その弟子たちに託して、イエスにこう言い送った。「おいでになるはずの方は、あなたですか。それとも、私たちは別の方を待つべきでしょうか。」イエスは答えて、彼らに言われた。「あなたがたは行つて、自分たちの聞いたり見たりしていることをヨハネに報告しなさい。盲人が見、足なえが歩き、らい病人がきよめられ、つんぼの人が聞こえ、死人が生き返り、貧しい者には福音が宣べ伝えられているのです。だけれども、わたしにつまづかない者は幸いです。」

(マタイの福音書11章2〜6節)

聖書を読んだり、福音のメッセージを聞いたりした方々の中に、神様はわかるけれどもイエス・キリストはわからない、という方がたくさんいらっしゃいます。そればかりか洗

礼を受けた人の中にさえもイエス・キリストがわからない、という方が少なくありません。そこで今日は、この聖書の箇所からイエス様がおっしゃった「だれでも、わたしに近づかない者は幸いです」というみことばの意味について、またどうすれば近づかずくことなくイエス様を知ることができるかという大切なテーマについて、ごいっしょに考えてみたいと思います。

### ユダヤ人はどのようなメシヤ(救い主)を待望していたか

まずはじめに、ユダヤ人がどのようにしてイエス・キリストにつまずいたかについて考えてみましょう。冒頭に引用した聖書の箇所の名前が出ているヨハネは、バプテスマのヨハネであります。このヨハネについては、聖書に次のように紹介されています。

そのころ、バプテスマのヨハネが現われ、ユダヤの荒野で教えを宣べて、言った。「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」この人は預言者イザヤによって、「荒野で叫ぶ者の声がする。『主の道を用意し、主の通られる道をまっすぐにせよ。』』と言われたその人である。

(マタイの福音書3章1〜3節)

三 「わたしにつまずかない者は幸いです」

ヨハネはその頃ヘロデ王によって牢に入れられていましたが、牢の中で聞いたイエス様のお言葉は、彼を含めたすべてのユダヤ人が待望していたメシヤのイメージとはまったく違っているので、自分の弟子たちを遣わしてイエス様が来るべき救い主かどうかを聞きに行ったのです。では、ユダヤ人が頭に描いていたのはどんなメシヤだったのでしょうか。

旧約聖書の中で神様はユダヤ人に対して、来るべきメシヤについて次のようにおっしゃっています。

見よ。その日が来る。——主の御告げ。——その日、わたしは、ダビデに一つの正しい若枝を起こす。彼は王となつて治め、榮えて、この国に公義と正義を行なう。その日、ユダは救われ、イスラエルは安らかに住む。その王の名は、「主は私たちの正義。」と呼ばれよう。

(エレミヤ書23章5〜6節)

当時の歴史的背景を考えてみますと、ダビデ王によって統一されたイスラエルは、その子ソロモン王の死後、北のイスラエル王国と南のユダ王国に分裂し、その後アッシリヤ、バビロニア、ペルシヤ、ギリシヤ、エジプト、シリヤなどの強国に次々と支配され、パプテスマのヨハネが伝道していた当時は、ローマに征服され、その支配下にあったのです。

したがって、ユダヤ人は自分たちを支配者の手から解放し、ユダヤの国を救い出してくれる王を、神様が約束されたメシヤとして長いこと待ち望んでいました。

神様が預言者エレミヤの口を通して預言されたメシヤは霊的なメシヤなのですが、彼らは肉の思いから自分たちの国を救ってくれる正義の王、強い人としてのメシヤ像を頭に描いていたのです。そのことについてはバプテスマのヨハネも同じでした。ですから彼の耳に入ってくるイエス様の外見や言動が、彼の頭にある堂々としたメシヤのイメージとはほど遠いばかりでなく、むしろ反対にみすばらしい姿で、弱い者、貧しい者、病んでいる者、悲しんでいる者と親しく交わっておられるというイエス様のうわさに当惑し、いったいこの人が果たして自分たちが待望していたほんとうのメシヤであろうかと、つまりき疑ったのであります。

### 聖書で預言されているメシヤ

しかし、聖書は預言者を通してはっきりと、メシヤは見映えのしない姿をとって来られる、あるいは柔和な方として来られると記しています。イザヤ書には次のように記載されています。

三 「わたしにつまずかない者は幸いです」

彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見  
ばえもない。彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知ってい  
た。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。

(イザヤ書53章2〜3節)

このようにはつきりと預言されていたにもかかわらず、イエス様の姿を見た者はバプテスマのヨハネに限らずだれでも、この方こそ救い主、メシヤだということがわからなかった  
のであります。私たちはイエス様の姿をすぐに目に浮かべることができません。それは多くの  
ヨーロッパの有名な画家たちが描いた、肌の色の白い神々しい気高い肖像画から想像す  
るイエス様の姿です。しかし、聖書にはイエス様はそのような姿、形をとって来られるの  
ではないと記されています。しかもゼカリヤ書には、

シオンの娘よ。大いに喜べ。エルサレムの娘よ。喜び叫べ。見よ。あなたの王が  
あなたのところに来られる。この方は正しい方で、救いを賜わり、柔和で、ろばに  
乗られる。それも雌ろばの子のろばに。

(ゼカリヤ書9章9節)

と書かれています。これも私たち人間の常識から考えれば理解できません。人間のイメー

ジにある王は大きなたくま逞しい馬に乗り、剛然とあたりをはらう姿ですが、神様が遣わされる王メシヤは、柔和で雌ろばの子ろばに乘られるような、へり下った姿で来られるとはつきり預言されていたのです。

このように、神様が預言者を通して私たちにお示しになっていたのにもかわらず、バプテスマのヨハネのような信仰のある人ですら、自分の思いに捕われて肉の目に見えるイエス様につまずいてしまったのであります。

人間はイエス・キリストのどこにつまずくのか

しかし今日の私たちもユダヤ人と同じようにイエス様につまずくのではないのでしょうか。では私たちはイエス様のどのようなところにつまずくのでしょうか。もう少し詳しく考えてみたいと思います。

一、貧しい生まれのイエス・キリストにつまずく

一つには私たち人間は、イエス様の貧しい生まれにつまずきます。マタイの福音書に次のように記されています。

三 「わたしにつまずかない者は幸いです」

それから、ご自分の郷里に行つて、会堂で人々を教え始められた。すると、彼らは驚いて言った。「この人は、こんな知恵と不思議な力をどこで得たのでしょうか。」

この人は大工の息子ではありませんか。彼の母親はマリヤで、彼の兄弟は、ヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではありませんか。妹たちもみな私たちといっしょにいるではありませんか。とすると、いったいこの人は、これらのものをどこから得たのでしょうか。」こうして、彼らはイエスにつまずいた。

(マタイの福音書13章54〜57節)

イエス様の郷里のユダヤ人は、イエス様がほかの兄弟たちと同じに大工の子として生まれ、育つたのをよく知っているので、どうしても貧しい大工の子としてしかイエス様を見ることができず、そのためイエス様が神の子としての権威をもつて聖書の説き明かしをされたたり、病人を癒されたりすることにつまずきました。もし私たちが彼らと同じ立場に置かれたらどうでしょうか。やはり同じようにつまずくのではないのでしょうか。

二、罪を赦すイエス・キリストにつまずく

二つ目にはイエス様が、罪を赦すと言われたことにつまずきます。

イエスは舟に乗って湖を渡り、自分の町に帰られた。すると、人々が中風の人を床に寝かせたままで、みもとに運んで来た。イエスは彼らの信仰を見て、中風の人に、「子よ。しっかりといなさい。あなたの罪は赦された。」と言われた。すると、律法学者たちは、心の中で、「この人は神をけがしている。」と言った。

(マタイの福音書9章1〜3節)

イエス様は、ご自分が罪を赦すことのできる権威を持つ者であることをお示しになるために、このような発言をなさいました。しかし罪を赦すことのできる方は、神様のほかにはいないことを知識として知っている律法学者たちは、人としてこの世においてになったイエス様を神の子と認めることはできませんでした。ですからイエス様が言われたことは神を冒瀆するものだと、イエス様の言葉につまずいたのです。イエス様を人として見た場合には、この律法学者に限らずだれでも同じように聖書の中でおっしゃっているイエス様の言葉につまずくのではないのでしょうか。このように私たちがイエス様につまずく場合はほとんどと言ってよいくらい、イエス様を人として見ているからであります。

三、聖書を教える権威を持つイエス・キリストにつまずく

### 三 「わたしにつまずかない者は幸いです」

三つ目にはイエス様が宮で教える権威を持つておられることにつまずきます。イエス様が神の宮で天の御国に入れる者はどんな人か、入れない者はどういう人かということ、たとえをもつて教えておられたときに、祭司や民の長老がイエス様を次のように非難しました。

イエスが宮にはいって、教えておられると、祭司長、民の長老たちが、みもとに来て言った。「何の権威によつて、これらのことをしておられるのですか。だが、あなたにその権威を授けたのですか。」

(マタイの福音書21章23節)

イエス様は人間から授かった権威によつてではなく、神の権威によつて宮で人々に教えておられました。しかし人間は神から権威を与えられるということを理解することができません。人間が人間に対して何らかの権威を与えることができるというところしか理解できません。神の宮で人に教えることができる者は、祭司や律法学者などのような、聖書の知識を持つ専門家として権威が認められた者に限られていると考えていた人々は、聖書について正式な教育を受けもせず、したがって資格も権威もないイエス様が堂々と神の国について教えておられたことにつまずいたのです。しかしその道の専門家の権威しか認めない

のは何も彼らだけではありません。私たちも同じようにつまずきます。

四、神を父と呼ぶイエス・キリストにつまずく

四つ目には、イエス様が神様を父と呼び、ご自分と神とは一つであると言われたことにつまずきます。これも大きなつまずきであります。神様を父と呼び、自分と神様とは一つであるというのは、とんでもないことと思えます。

「わたしの羊はわたしの声を聞き分けます。またわたしは彼らを知っています。そして彼らはわたしについて来ます。わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。わたしに彼らをお与えになった父は、すべてにまさって偉大です。だれもわたしの父の御手から彼らを奪い去ることはできません。わたしと父とは一つです。」ユダヤ人たちは、イエスを石打ちにしようとして、また石を取り上げた。

(ヨハネの福音書10章27～31節)

ユダヤ人も私たちもイエス様を人として見ている限り、イエス様のおっしゃった「自分

三 「わたしにつまずかない者は幸いです」

の父は神である」という言葉につまずきます。

五、罪人と親しく交わるイエス・キリストにつまずく

五つ目には、イエス様が罪人と親しく交わられることにつまずきます。

イエスは、エリコにはいつて、町をお通りになった。ここには、ザアカイという人がいたが、彼は取税人のかしらで、金持ちであった。彼は、イエスがどんな方か見ようとしたが、背が低かったので、群衆のために見ることができなかった。それで、イエスを見るために、前方に走り出て、いちじく桑の木に登った。ちょうどイエスがそこを通り過ぎようとしておられたからである。イエスは、ちょうどそこに來られて、上を見上げて彼に言われた。「ザアカイ。急いで降りて來なさい。きょうは、あなたの家に泊まることにしてあるから。」ザアカイは、急いで降りて來て、そして大喜びでイエスを迎えた。これを見て、みなは、「あの方は罪人のところに行つて客となられた。」と言つてつぶやいた。

(ルカの福音書19章1〜7節)

当時、取税人はローマ帝国の税金をユダヤ人から取り立てる請負人の手先で、できるだ

け人々から税金を多くしほり取って、余分の金を自分の懐に入れることが多かったので、人々から憎まれ、ユダヤ人社会の仲間入りすることもできず、友人となることさえもいやがられ、犯罪人や売春婦と同じ扱いを受けていました。ところが神の子と称するイエス様がそのような社会的に軽蔑されている人々の友として彼らと親しくされたということは、ユダヤ人から見れば不可解なことだったので。ふつう人間は友人や仲間によってその人の属している社会階層を判断しますから、そのために意識して自分よりもはるか下の階層の人々とは付き合わぬようにする人が多いのではないでしょうか。ある国々では今でもそれが非常にはつきりとしています。そのような人間の目から見れば、イエス様のなさったことがつまずきになるのは当然でしょう。

六、律法を守らないイエス・キリストにつまずく

六つ目には、イエス様が律法を守らないことにつまずきます。

ヨハネの弟子たちとパリサイ人たちは断食をしていた。そして、イエスのもとに来て言った。「ヨハネの弟子たちやパリサイ人の弟子たちは断食するのに、あなたの弟子たちはなぜ断食しないのですか。」

三 「わたしにつまずかない者は幸いです」

律法にはいろいろなときに身を戒める目的で断食することが定められていますが、パリサイ人は週に二度断食をしていました。イエス様は断食を否定されたのではなく、ただそれが単に形式的に行われることを戒めておられるのです。断食に限らず、イエス様は律法を形式的に守ることは偽善的なことだとおっしゃっているのです。

断食するときには、偽善者たちのようにやつれた顔つきをしてはいけません。彼らは、断食していることが人に見えるようにと、その顔をやつすのです。

(マタイの福音書6章16節)

イエスはまた会堂にはいられた。そこに片手のなえた人がいた。彼らは、イエスが安息日にその人を直すかどうか、じつと見ていた。イエスを訴えるためであった。イエスは手のなえたその人に、「立って、真中に出なさい。」と言われた。それから彼らに、「安息日にしてよいのは、善を行なうことなのか、それとも悪を行なうことなのか。いのちを救うことなのか。それとも殺すことなのか。」と言われた。彼は黙っていた。イエスは怒って彼らを見回し、その心のかたくななのを嘆きながら、その人に、「手を伸ばしなさい。」と言われた。彼は手を伸ばした。するとその

(マルコの福音書2章18節)

手が元どおりになった。

(マルコの福音書3章1〜5節)

イエス様はこのように律法を正しく守るといふのはどういふことか、どのような心掛けが大切であるか、ただ目に見える形で守るのはほんとうの守り方ではないといふことをおっしゃっているのです。けれども彼らは「神を恐れよ」と説きながら一見律法を守っていないように見えるイエス様を、社会的秩序に反するものとみてつまずいたので、私たちも聖書を表面的に読む限りはイエス様のなさったことが理解できません。

七、神の子と称しながら、無抵抗で敵の手に捕えられたイエス・キリストにつまずく

イエス様は、水の上を歩かれたり、死人を生き返らせたりするような、人間にはとうていできない力を示されましたが、そのような力を持ったイエス様がいと簡単に捕えられ十字架に架けられたのはどういふことか、おかしいではないか、このことに弟子たちをはじめ多くの人はつまずきます。しかしイエス様は弟子たちやユダヤ人が自分につまずくとご自身で次におっしゃっていたのです。

そのとき、イエスは弟子たちに言われた。「あなたがたはみな、今夜、わたしの

### 三 「わたしにつまずかない者は幸いです」

ゆえにつまずきます。「わたしが羊飼いを打つ。すると、羊の群れは散り散りになる。」と書いてあるからです。

(マタイの福音書26章31節)

「わたしが羊飼いを打つ」とは、神様が羊である人間の罪を、羊飼いである神の御子イエス・キリストに負わせて罰するという神様のご計画のことを指しています。イエス様のおっしゃった通り、弟子たちもユダヤ人もつまずきました。イエス様が十字架に架けられたときユダヤ人たちは次のように言いました。

民衆はそばに立ってながめていた。指導者たちもあざ笑って言った。「あれは他人を救った。もし、神のキリストで、選ばれた者なら、自分を救ってみろ。」

(ルカの福音書23章35節)

聖書のこの箇所を読んだとき、同じように「どうして神の子であれば自分を救えないのか」と疑問に思われる方がたくさんいらっしゃるのではないのでしょうか。

イエス・キリストが神の姿を取らず、貧しい人として来られた理由

イエス様は、ご自分が神の御子でありながら、なぜ神々しい神としての姿でこの世にお

いではならなかったのか、なぜユダヤ人をはじめとして私たちをもつまづかせるような貧しい者の姿でおいでになったのか、という理由を次のようにはっきりおっしゃっています。

人の子が来たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためである……。

(マタイの福音書20章28節)

神の御子であるイエス様が人の子として貧しく生まれてくださった目的は、王として私たち人間が仕えるためではなく、反対にしもべとして私たちに仕えてくださるため、そして私たちの罪を贖うためにご自分のいのちを与えてくださるためである、とおっしゃっているのです。パウロは、これについて次のように言っています。

キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができずには考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。

(ピリピ人への手紙2章6～8節)

三 「わたしにつまずかない者は幸いです」

聖霊によつて開かれた靈によりイエス様を知る

キリスト者の中にもイエス様の道徳的な教訓にだけ目を留めて、その教えを守ることが信仰であると信じている方が少なくありません。そういう方は、栄光の座から降りてこの世に貧しくなつて来られたイエス様が自分のために何をしてくださったか、ということがよくわかつておられないのです。そういう方は、自ら卑しくなられたイエス様が自分の罪を代わつて負つて十字架で死んでくださったからこそ、自分は罪から解放されたのだというものがわかつておられないのです。貧しい人の姿を取つておいでになつたイエス様こそが自分の唯一の救い主であることは、神の御霊、聖霊によつてその人の靈の目が開かれたときでなければわかりません。パウロは次のように言っています。

私は、あなたがたに次のことを教えておきます。神の御霊によつて語る者はだれも、「イエスはのろわれよ。」と言わず、また、聖霊によるのでなければ、だれも、「イエスは主です。」と言うことはできません。

(コリント人への手紙第一 12章3節)

口先だけで「主よ、主よ」と言うのは簡単です。しかし、心から「私の主イエス様」と

言うことができるのは、イエスはキリストであると知識的に理解したからではなく、イエス様の前にへり下り、心砕かれて「私の罪のために死んでくださったことをありがとうございます」と心から感謝する者だけなのです。これこそが御霊に導かれたキリスト者の姿にほかなりません。

わたしに「つまずかない者は幸いです」

「わたしに「つまずかない者は幸いです」とイエス様はおっしゃいました。神様とともに天地万物を創造された全能の神イエス様は、はるかかなたの天の栄光の座から、すべての者を救うために貧しい人間として、しかも無力になって、この汚れに満ちた闇の世の中に降りて来てくださり、私たちの中に立って「わたしに「つまずかない者は幸いです」とおっしゃっているのです。私たちひとりひとりがイエス様の救いを受け入れて天の御国を受け継ぐか、それともイエス様につまずき、救いの御手を拒んで滅びの道を選び、イエス様を悲しませ嘆かせるか、それは私たちの選択一つにかかっています。だからこそイエス様は繰り返し繰り返し私たちに、「わたしに「つまずかない者は幸いです」と語りかけ続けておられるのです。神様に対する人間の背きの罪からの救いは、神にして人であるイエス様に

三 「わたしにつまずかない者は幸いです」

よってしか成し得ないにもかかわらず、人間がそのことにつまずくことに心を痛められてイエス様は「わたしにつまずかない者は幸いです」とおっしゃっているのです。イエス様の愛は何と深いことでしょうか。まだイエス様をご存じない方は、私たちを罪から救い出すために、神でありながら貧しい人の姿をとって私たちのところまで降りて来てくださったイエス様につまずくことなく、すなおにイエス様を救い主と信じ受け入れて、感謝と喜びに満たされますように、心からお祈り致します。



カタクリ

## 四 心に書かれた肩書

主はサムエルに仰せられた。「彼の容貌や、背の高さを見てはならない。わたしは彼を退けている。人が見るようには見ないからだ。人はうわべを見るが、主は心を見る。」

(サムエル記第一 16章7節)

今日はこのみことばから、人のうわべを見る私たちと、人の心をご覧になる主なる神様について、ごいっしょに考えてみたいと思います。

人間はうわべで人を評価する

私たちはふつう人をどのような基準で評価しているでしょうか。私たちが「あの人は立派だ」とか、「あの人は偉い」とか言うとき、私たちの目で見えるもの、たとえばその人

の風貌、言動、服装や身分、職業、地位、業績などを基準にして、つまり人のうわべだけを見て、その人を評価してしまうことが多いと思うのです。

人をうわべで評価する習慣は、名刺に肩書を入れることから窺われます。学校を卒業して社会に出ると、ほとんどの人はまず名刺を作るでしょう。名刺は初対面の人に自分を紹介するために仕事の上で必要なものだからです。そのため名刺にはふつう氏名、住所のほかは身分や地位や職業を示す肩書が印刷されています。しかし、私たちは名刺に刷られた肩書によって、知らず知らずその人の価値を評価し、その人に対する態度を変えてしまうのではないのでしょうか。もしその人が自分よりも上の身分、地位であるとわかれば、へり下ったような態度を取り、反対に自分よりも下と知れば、意識してではないにせよ高圧的な態度を取ったりしがちなのではないのでしょうか。

温泉場の湯の中で知り合い、お互いに親しく対等に話し合った後で、湯から上がって名刺を交換し、相手の肩書を見たときに態度が変わってしまったという笑い話をよく聞きます。また高い役職に就いていたときには恐れ敬われていた人が、退職したり左遷されたとともに挨拶もされなくなったという話も聞きます。このような話を聞くと、世知辛いこの世で生きるために自然と身に着けた処世術がそうさせたと思ういっぽうで、肩書という、

うわべのものに振り回される人間の悲しさ、愚かさを覚えざるを得ません。しかし、これはわが国だけに見られる現象ではないようです。ヨーロッパのある国々では、今でも貴族という身分を持っているだけで人は一目を置くそうですし、貴族のない米国では、その代わりに学歴をもって身分を作ろうという風潮があります。司馬遼太郎氏は著書「アメリカ素描」の中でこのことに触れ、子どもに有名な大学を卒業して高い学歴を身に付けてもらいたいという願望が昂じて、「ハーバード、プリンストン、イェール」という欲張った名前をつけた母親がいるという嘘のような話を聞いたと記しています。

神様は人の心を見て人間を評価される

しかし、このように目で見えるものによって人を評価してしまう習慣は、何も今に始まったことではありません。時代を超えて昔から人間に共通してあったことでした。冒頭でお読みした聖書の箇所からもそれを知ることができます。紀元前千年、主なる神様はユダヤの初代の王サウルがみこころに反したために、彼を退けてみこころにかなう王を選ばれました。神様は預言者サムエルに、ユダ族のエッサイという人の七人の息子たちの中のみこころにかなう王を見つけたとおっしゃいました。サムエルはエッサイの息子たちの中で

背が高く、すぐれた容姿の長男エリアブを見て、彼こそ神様に選ばれた者と思いました。しかし神様のみこころはサムエルの評価とはまったく異なりました。神様は彼に「人はうわべを見るが、わたしは心を見る」とおっしゃり、長男のエリアブではなく、主に全き信頼を置いていた忠実な羊飼いの末っ子ダビデをみこころにかなう者として王にお選びになったのです。私たちはここに人間の選びの基準と神様の選びの基準の根本的な違いを見るのであります。神様は人間の価値を外見や肩書ではなく、その人間の心によって評価するとおっしゃっているのです。

### 心に書かれた肩書

このように申して来ますと、「いや自分には人に威張れるような肩書などないし、また外見や肩書で人を見てはいない」と言う方があると思います。しかし、その方も立派に肩書を付けておられるのです。それは自尊心、プライドという心の肩書であります。「私は自分の力で立派に生きて来た」「私は大した者ではないが、それでも人より多少はすぐれたところがある」「私は人に陰口を言われるような生き方はしていない」などと自らを評価して高ぶる心、おのれを誇る心、言いかえれば自分を義とする心、このような自尊心は

だれにでもあるはずです。この自分を義とする心、自尊心は人間の自己中心、自己愛から発しています。ですから人からさげすまれたり、馬鹿にされたり、疎外されたり、軽蔑されたり、無視されたりすれば腹が立ちます。ところが人の心を問題になさる神様は、心に書かれたこのような肩書をみこころにかなわぬとおっしゃるのです。

### 神のみこころにかなう心の肩書、かなわない心の肩書

では、神様のみこころにかなう心の肩書、あるいはかなわない心の肩書とは、どのようなものでしょうか。聖書にその答があります。

イエスは出て行き、取税所にすわっているレビという取税人に目を留めて、「わたしについて来なさい。」と言われた。するとレビは、何もかも捨て、立ち上がってイエスに従った。そこでレビは、自分の家でイエスのために大ぶるまいをしたが、取税人たちや、ほかに大ぜいの人たちが食卓に着いていた。すると、パリサイ人やその派の律法学者たちが、イエスの弟子たちに向かって、つぶやいて言った。「なぜ、あなたがたは、取税人や罪人どもといっしょに飲み食いするのですか。」そこで、イエスは答えて言われた。「医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人で

す。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招いて、悔い改めさせるために来たのです。」

(ルカの福音書5章27〜32節)

自分を義人だと自任し、他の人々を見下している者たちに対しては、イエスはこのようなたとえを話された。「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりパリサイ人で、もうひとは取税人であった。パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆるする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようとせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人にはありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」

(ルカの福音書18章9〜14節)

このエピソードの中には二つの正反対の心の肩書を持った人たちが登場します。一つは

#### 四 心に書かれた肩書

自分の心に「義人」という肩書を付けているパリサイ人と律法学者たち、もう一つは自分の心に「罪人」という肩書を付けている取税人であります。当時、パリサイ人や律法学者はユダヤ人の指導者として社会的な身分が高く、彼ら自身もこのエピソードにあるように自分は律法を正しく守っているという自負心が強い人たちでした。しかしイエス様は彼らについて次のように厳しく非難されています。

律法学者たちには気をつけなさい。彼らは、長い衣をまとって歩き回ったり、広場であいさつされたりすることが好きで、また会堂の上席や宴会の上座が好きです。また、やもめの家を食いつぶし、見えを飾るために長い祈りをします。こういう人たちは人一倍きびしい罰を受けます。

(ルカの福音書20章46〜47節)

忌まわしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。あなたがたは、杯や皿の外側はきよめるが、その中は強奪と放縦でいっぱいです。目の見えぬパリサイ人たち。まず、杯の内側をきよめなさい。そうすれば、外側もきよくなります。忌まわしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。あなたがたは白く塗った墓のようなものです。墓はその外側は美しく見えても、内側は、死人の骨や、あらゆる汚れ

たものがいっばいのように、あなたがたも、外側は人に正しいと見えても、内側は偽善と不法でいっばいです。

(マタイの福音書23章25～28節)

いっぽう取税人は社会的な身分が低いだけでなく、不正な税の取り立てをして私服を肥やし人々から嫌われているために、自分は神様の前に正しいとは言えない罪人であるということを自ら認めて、砕かれた心を持つている者が多かつたようです。人の心をご覧になる神様は、心の中に義人の肩書を持つ、高ぶった心のパリサイ人ではなく、このような罪人の肩書を持つ、砕かれた心の取税人をご自分のところに招かれたのです。

いったい私たちはどちらの肩書を持つ者でしょうか。自分自身の心の中を吟味したときに、このエピソードに出て来るパリサイ人のような、内側は汚いのに外側だけを取り繕って正しく見せたいというパリサイ人的な義人の肩書を付けているのではないのでしょうか。

イエス様はたびたびパリサイ人や律法学者の心の中を見抜かれ、鋭く指摘されています。たとえばマルコの福音書の中で、イエス様が中風の病人に「あなたの罪は赦されました」と言われたのを聞いた律法学者たちが、心の中でイエス様を非難した言葉をイエス様はお聞きになつて次のように反論されています。

#### 四 心に書かれた肩書

その場に律法学者が数人すわっていて、心の中で理屈を言った。「この人は、なぜ、あんなことを言うのか。神をけがしているのだ。神おひとりのほか、だれが罪を赦すことができよう。」彼らが心の中でこのように理屈を言っているのを、イエスはすぐにご自分の霊で見抜いて、こう言われた。「なぜ、あなたがたは心の中でそんな理屈を言っているのか……」

(マルコの福音書2章6〜8節)

このように、神の御子であるイエス様は私たち心が心の中で何を考えているのかをすべて見抜かれる方でありました。したがって、私たちの心の中を全部ご存じのこのイエス様の御前に、私たちは裸になって「主よ。あなたはすべてをご存じです。私の中には何一つ良きものはありません」と心砕かれ、へり下って出るほかないのです。ダビデは、

主は心の打ち砕かれた者の近くにおられ、たましいの砕かれた者を救われる。

(詩篇34篇18節)

と言っていますが、神様は義人ではなく心の砕かれた者、自尊心の高い者ではなく、へり下ってたましいの砕かれた者を救い出すために、ひとり子イエス様をこの世にお遣わしになつたのであります。

イエス様は、

心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。

(マタイの福音書5章3節)

とおっしゃいました。「心の貧しい者」とは心が砕かれ、自分の愚かさ、弱さを知った者であります。イエス様はそのような者は幸いである、なぜならば天国はそのような人のためにあるから、とおっしゃったのです。心のへり下った者はイエス様の招きに応じて自分の罪を悔いてみもとに行くことができ、その結果イエス様の十字架の贖いのみわざによって罪が赦され、天国の国籍を与えられるからです。

パウロはテモテへの手紙第一の中で次のように言っています。

私は以前は、神をけがす者、迫害する者、暴力をふるう者でした。それでも、信じていないときに知らなかったことなので、あわれみを受けました。私たちの主の、この恵みは、キリスト・イエスにある信仰と愛とともに、ますます満ちあふれるようになりました。「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。しかし、そのような私があわれみを受けたのは、イエ

#### 四 心に書かれた肩書

ス・キリストが、今後彼を信じて永遠のいのちを得ようとしている人々の見本にしよう、まず私に対してこの上ない寛容を示してくださいからです。

(テモテへの手紙第一 1章13～16節)

パウロはイエス様に救われる前は熱狂的なユダヤ教信者であり、自分の信じているユダヤ教が正しく、イエスをキリスト(救い主)と信じる人々を神を汚す者として迫害し、殺害の手助けさえしていました。その当時、彼自身の心の肩書は「義人」でした。しかし復活されたイエス様との劇的な出会いによって、彼は自分を正しいと信じていたのがまったくの間違いであり、神様の御子であり救い主であるイエス様を憎んでいた自分の大きな罪がはっきりと示され、心が砕かれて「自分は罪人のかしらであり、神のあわれみの見本である」と告白するようになったのです。イエス様に出会ってから後の彼の心の肩書は「罪人のかしら」、「神のあわれみの見本」と変わりました。

さきほど申しましたように、私たち人間は自分を義とし、自分を誇るという生まれつきの罪の性質があります。そのためにうわべを飾り、うわべを取り繕うことに心を遣ってしまいます。「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです」とおっしゃったイエス様は、さらに

心のきよい者は幸いです。その人は神を見るからです。

(マタイの福音書5章8節)

ともおっしゃっています。自分を義とするような心を持つ限り、心の目は閉ざされ、私たちは神様を見ることはできません。心が聖められてはじめて、その聖められた心の目で神様を見ることができるようになるのです。ではどうしたら心が聖められるのでしょうか。私たちは自分自身で自分の心を聖めることは決してできません。さきほどの取税人のように碎かれた心で神様の前に行き、「神様、私のような心の汚れた者をあわれんでください」と心の底からお願ひすれば、神様はひとり子のイエス様が十字架の上で流された聖い血によって汚れた心を洗って聖くしてください、「あなたはもう聖い」と言ってくださいのです。パウロはコロサイ人への手紙の中で次のように言っています。

あなたがたも、かつては神を離れ、心において敵となつて、悪い行ないの中にあつたのですが、今は神は、御子の肉のからだにおいて、しかもその死によつて、あなたがたをご自分と和解させてくださいました。それはあなたがたを、聖く、傷なく、非難されるところのない者として御前に立たせてくださるためでした。

(コロサイ人への手紙1章21〜22節)

#### 四 心に書かれた肩書

このように御子イエス様の血による贖いのみわざによって聖められた私たちの心の目は神様を見ることができるようになるのであります。

#### 救われた者の心に書かれた肩書

こうしてイエス様によつて罪赦され、罪から救い出された者は、もはや自分を誇ることはありません。自分には誇るべきものは何一つなく、欠け多き土の器に過ぎないことを知ったからであります。しかもそのような器をイエス様が愛し、ご自分のものとしてくださっていること、またそのような器の中にイエス様という、私たちにとつて何よりも高価な尊い宝を入れておくことを知り、そのイエス様に心から感謝し、器を誇るのではなく、器の中に住んでくださるイエス様を誇るようになります。パウロはコリント人への手紙第二の中で次のように言っています。

私たちは、この宝を、土の器の中に入れておいてあげます。それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものでないことが明らかにされるためです。

(コリント人への手紙第二 4章7節)

また詩篇の中でダビデは次のように言っています。

今こそ、私は知る。主は、油をそそがれた者を、お救いになる。主は、右の手の救いの力をもって聖なる天から、お答えになる。ある者はいくさ車を誇り、ある者は馬を誇る。しかし、私たちは私たちの神、主の御名を誇ろう。

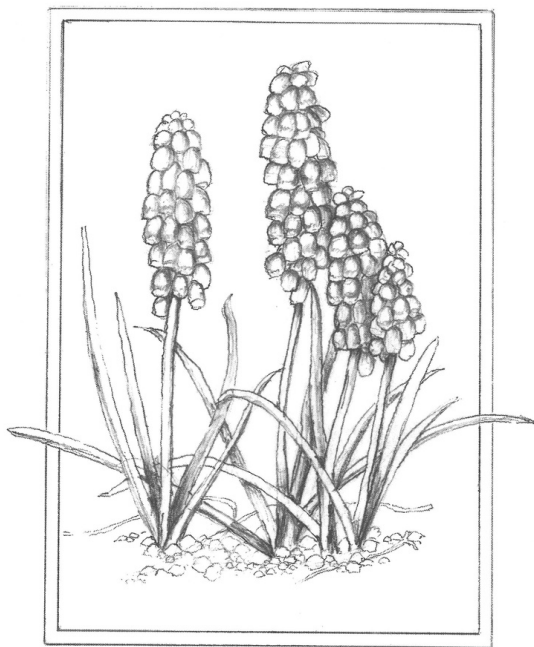
(詩篇20篇6〜7節)

私たちは救われる前、イエス様に出会う前は、みな心に「私は義人」とか「私は立派な人」という肩書を持つ者でした。しかし、救われた後、イエス様に出会った後は、その肩書は「私は罪赦された者」、「私は土の器」、「私はキリストのもの」、「私は主を誇る」というように書き替えられたのです。イエス様はそのような者をご自分のしもべとして、ご自分の栄光を現わされるために、イエス様を証しするために、この世の中にお遣わしになり、ご自分の尊い救いをひとりでも多くの人に宣べさせようとなさるのであります。

私たちはイエス様を人々に紹介するとき、まず自己紹介しなければなりません。そのとき「私はイエス・キリストを信じている立派な者です」と自分を誇るでしょうか。そうではなく心から「私はイエス・キリストという宝を入れてある土の器に過ぎません。私はキリストのものです」と自己紹介するのではないのでしょうか。そのときイエス様は私たち

#### 四 心に書かれた肩書

を通して働いてくださり、このような土の器を用いて救いのみわざを達成してくださり、ご自身の栄光を現わしてくださるのであります。



ムスカリ

## 五 新しい天地と古い天地

見よ。まことにわたしは新しい天と新しい地を創造する。先の事は思い出されず、心にも上ることもない。だから、わたしの創造するものを、いついつまでも楽しみ喜び。

(イザヤ書65章17節)

今日は、はじめにこの壮大な天と地をお造りになった神様が、これからまったく新しい天と地を創造するご計画を持っておられるという、私たちの思いを超えたこのみことばについて、また神様の御手の中にある私たちの将来はどのようなのか、という大きな問題について真剣に考えてみたいと思います。

神は天地を二度造られる

聖書のいちばんはじめの創世記の一章一節には、

初めに、神が天と地を創造した。

(創世記一章一節)

と、たいへんに力強い神様の壮大なみわざが、この短いことばによって端的に記されています。けれども聖書の最後にあるヨハネの黙示録二十一章の一節には、

また私は、新しい天と新しい地とを見た。以前の天と、以前の地は過ぎ去り、もはや海もない。

(ヨハネの黙示録21章1節)

とあるのです。これで神様が二度天地をお造りになるということをお示しになっていることがわかります。しかし神様が天地を二度もお造りになるとはいったいどういうことなのか。

神様が最初に造られた天地は、今私たちが住んでいるこの天地であります。ところがヨハネは神様から幻を与えられて新しい天と地とを見ており、またそれまでの天と地は過ぎ

## 五 新しい天地と古い天地

去つたと預言しているのです。冒頭のみことばにある「見よ。わたしは新しい天と新しい地を創造する」と神様がおっしゃつたのは、ヨハネが幻で見た新しい天と地であります。しかし新しい天と地が創造されたときに、今の天地は過ぎ去るといふのであれば、今の天と地に住んでいる私たちの存在はいつたくなるのかという大問題が生じます。

神様が今の宇宙を創造されたということは、私たちが人間の乏しい知識に捕らわれずに謙虚な心で、すなおに完全な調和をもつて運行している宇宙や、私たちの目の前に繰り広げられる自然の営みを観察するとき容易に理解できます。ではなぜ神様は新しい天と地をお造りになるのでしょうか。また神様がおっしゃる新しい天と地とは、いつたいどんなところなのでしょう。そこは今私たちの住んでいる世界とどのように違うのでしょうか。

はじめに神が造られたものは完全であつた

そのことを考える前に、ぜひ私たちが知っておかなければならないのは、神様は完全にして永遠に存在される方であり、ご自分の造られた世界やすべての被造物を愛し、支配しておられる方であるということです。そのような完全な神様ですから、ご自分がお造りになつた今の天地万物も、造られた当初は神様のお考え通りの完全な出来栄であつたので

す。その証拠に、創世記には神様は被造物をお造りになりながら、一つ一つその出来栄をご覧になって「よし」と満足され、そして最後に、お造りになったすべてのものをご覧になってたいへんに満足されたと記されています。

そのようにして神はお造りになったすべてのもをご覧になった。見よ。それは非常に良かった。

(創世記1章31節)

人間は神様が創造のみわざの最後に、最も大きな期待を持って、しかもご自分のかたち  
に似た者としてお造りになった被造物であります。ですから造られた最初の人間アダムも  
完全でありました。創世記には次のように記されています。

神はアダムを創造されたとき、神に似せて彼を造られ、男と女とに彼らを創造さ  
れた。神は彼らを祝福して、その名をアダムと呼ばれた。

(創世記5章1節)

神様はご自分に似せてお造りになった人間を期待を込めて祝福されました。では神様が  
期待された人間とはどんな人間なのでしょう。それは神様のみこころにすなおに従う人  
間であります。神様は完全に正しい方ですから、その神様に従っていれば人間は完全に正

## 五 新しい天地と古い天地

しいからであります。

### 罪のために不完全になった人間

ところがアダムは神様の期待を裏切り、サタンの誘惑に乗って神様のみこころに背き、神様に従うのでなく自分の欲に従って神様から心が離れてしまいました。これがいわゆる人間の原罪であります。私たち人間はみなアダムの子孫であります。アダムの子孫である以上、私たち人間は生まれながら罪の性質を遺伝子として持つ不完全な者になってしまったのであります。パウロはこのことについて次のように言っています。

ひとりの人によって罪が世界にはいり、罪によって死がはいり、こうして死が全人類に広がった……。

(ローマ人への手紙5章14節)

アダムの子孫である人間は、ますますその数を増やして行きましたが、それは同時に神様の前にますます悪を増し加えて行くことにもなったのです。神様は人間を造つたことを後悔なさり、人間を地上から消し去る決心をなさいました。創世記には次のように記されています。

主は、地上に人の悪が増大し、その心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾くのをご覧になった。それで主は、地上に人を造つたことを悔やみ、心を痛められた。そして主は仰せられた。「わたしが創造した人を地の面から消し去ろう。人をはじめ、家畜やほうもの、空の鳥に至るまで。わたしは、これらを造つたことを残念に思うからだ。」しかし、ノアは、主の心になつていた。

(創世記 6章5〜7節)

こうして神様はみこころにかなうノアとその家族、およびひとつがはずの動物たちを除くすべての人間と生物を、大洪水によって地上から消し去られたのであります。しかし義人ノアも所詮しよせんはアダムの子孫でありましたから、ノア自身には罪が表には現われませんでした。したが、ノアの中に潜んでいた罪の遺伝子はノアの子孫に受け継がれました。そのため人間は相変わらず神様に従うことをせず、神様の前に罪を犯すような生き方を続け、その罪のために人はだれでも死ななければならなくなつたのであります。

さてここでお話しておかなければならないのは、私たちはふつう死といえは肉体の死を意味しますが、肉体の死だけでなく、靈魂の死、靈魂の永遠の滅びも合わせた死が、聖書の意味するほんとうの死であるということです。

## 五 新しい天地と古い天地

### 神が新しい天地を造られる理由

人間の歴史は罪人の歴史と言ってよいでしょう。神様がさまざまな方法を用いて、ご自分から心が離れた人間に対し、ご自分に目を向けるように試みられるにもかかわらず、人間の悔い改めはいつも一時的であり、神様に罪を悔い改めても、すぐにまた自己中心の考えに戻って、自分勝手に生きてしまうという罪人の歴史であります。何でも好き勝手にできると思い上がった人間は、神様がお造りになった被造物までも自分の意のままに利用します。

ご存じのように最近ますますひどくなっている環境破壊、環境汚染は、そのような傲慢な人間の行為の結果として生じたものであります。神様がお造りになった美しい自然や生物を、私たち人間は自分の所有物のように好き勝手に利用したり捨てたりしているのです。そのような人間の身勝手は今や地球全体、被造物全体に修復不可能なほどのダメージを与え、その状況の一部がようやく人間の目にも明らかになって来ました。そして、あわてて開かれたのが先頃行われた地球温暖化防止の京都会議（一九九七年）です。

人間の快適な生活は電気、ガスや車によって支えられていると言ってよいでしょう。し

かし電気やガスは石油や石炭を燃やして作られます。また車はガソリンや軽油を燃料にして動きます。これらの石化燃料を燃やせば必ず二酸化炭素ができます。二酸化炭素は温室効果ガスとも言われます。なぜそう言われるかといいますと、排出された二酸化炭素が海や森林に吸収され得る量を越えたと地球の上空にどんどん蓄積し、それが温室のような作用をはたし、地球が太陽から受けた熱の放散を抑えるからです。

地球上空の二酸化炭素が増加し、そのために地球の気温が僅かずつ上昇していることはすでにだいぶ前からわかっています。それが人類の生存をも脅かすことになる。遅まきながら気づいたのは、この温暖化現象によって地球全体の気温が上昇して南極圏や北極圏の水が解け始め、海面の水位が上ってすでに低い陸地が水没したり、気候に大きな変化が起こって大干ばつや大洪水や大きな森林火災が世界各地に発生し、地球の砂漠化が年々進み、また熱帯地方にしか生息できなかったマラリヤを媒介するハマダラ蚊の生息地が広がって、今まで流行の見られなかった国々にもマラリヤが発生し始めた、などという具体的事実が発生したからでした。

今度の会議で決まったことは、この地球の温暖化を食い止めるために各国が具体的に温暖効果ガスの排出量を削減しようと、その削減目標を先進国平均で五・二パーセント、E

## 五 新しい天地と古い天地

U各国八パーセント、米国七パーセント、日本六パーセントという数値で示して約束したことでした。しかしこの数値は科学的な根拠によつたものではなく、自国の経済に影響のある削減量を最小限にしたいという各国の自己主張、エゴがぶつかり会い、政治的な取り引きでようやく決まつたものであり、この程度の削減率では将来の気温上昇を、危険回避基準である二度C以内に抑えることなどはとうてい不可能、というのが専門家の一致した見解です。この地球温暖化という問題は、人間の罪が今の世界を汚染し破壊して行くほんの一例に過ぎませんが、このようにして人間の罪によつて神様のお造りになつた地球は今や加速度的に汚され、損なわれて行つていきます。

神様はご自分の尊厳と聖さのゆえに、人間の罪によつて損なわれ汚されて、不完全になつた古い世界をそのままにされることはおできになりません。そこで今の世界を壊し、もう一度みどころにかなう完全な天地を創造しようと決心されました。新しい天地は、罪汚れの気配さえない、まったく聖く、完全に神様のみどころが成る国、神様のご栄光が輝く国であります。神様はこのご計画を預言者イザヤの口を通して明らかになさつたのであり、それが冒頭の「見よ。わたしは新しい天と新しい地を創造する」とおっしゃつたみことばであります。

イエス・キリストは神とともに天地を創造される

さて聖書には、また次のような驚くべきことが書かれています。それは神様が今の天地を創造されたとき、はじめから御子イエス様が父なる神様とともに創造のみわざに参加されたということです。

御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です。なぜなら、万物は御子にあつて造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も權威も、すべて御子によつて造られたのです。万物は、御子によつて造られ、御子のために造られたのです。

(コロサイ人への手紙1章15～16節)

多くの人々はイエス・キリストが二千年前にこの世界にお生まれになったという事実は知っていますが、それはイエス様の人としてのご生涯が二千年前に始まったという事実に過ぎません。実はイエス・キリストはこの世にご降誕になる以前は神様のひとり子としてはじめから父なる神とともにおられ、天で父なる神とともに働かれていたのであります。

## 五 新しい天地と古い天地

そして新しい天地創造のご計画のときにも、イエス様は主役を務められるのであります。  
人間が新しい天地に入れるためには

では私たちは新しい天地が創造されるそのとき、今の古い天地から新しい天地へそのまま移ることができるのでしょうか。それはできません。神様は罪に汚れた古い世界を完全に破壊してから新しい聖い世界をお造りになります。聖い世界にはそれにふさわしい聖い者しか入れません。ですから、罪に汚れた私たち古い人間はひとりとして、そのまま新しい聖い神の国に入れるはずがないのです。神様に従おうとせず、神様がお造りになった世界を汚した人間は、神様のさばきを受けて滅ぼされても当然な存在であり、新しい聖い国に入ることも望むべくもありません。

しかし人間をご自分のかたちにも似るものとしてお造りになったほど愛してくださいさる神様は、人間を滅ぼすに忍びず、何とかしてご自分の創造される新しい天地に移したいとお考えになりました。そこで罪に汚れた私たち古い人間を造り変えて新しい聖い人間にしようというご計画をお立てになり、それを実行されました。父なる神様は、神であるご自分のひとり子を人として汚れたこの世界にお遣わしになり、ご自分の御子に私たちひとりひと

りの罪を身代わりに負わせて十字架につけられたのです。この驚くべき神の御子イエス様の十字架での贖いのみわざが自分のためであつたとへり下つて信じ、イエス様の前に自分の罪を心から悔い改めたとき、はじめて人間は罪の汚れが聖められ、イエス様の復活にあずかり永遠に生きる新しいのちを与えられて、アダムに属する汚れた古い霊を持った人間から、イエス様に属する新しい聖い霊を持った人間に生まれ代わることができるようになつたのであります。パウロはエペソのキリスト者への手紙の中で次のように言つてい

ます。

神は私たちを世界の基の置かれる前からキリストのうちに選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。神は、ただみこころのままに、私たちをイエス・キリストによつてご自分の子にしようと、愛をもつてあらかじめ定めておられたのです。それは、神がその愛する方によつて私たちに与えてくださった恵みの栄光が、ほめたたえられるためです。私たちは、この御子のうちにあつて、御子の血による贖い、すなわち罪の赦しを受けているのです。これは神の豊かな恵みによることです。神はこの恵みを私たちの上にあふれさせ、あらゆる知恵と思慮深さをもつて、みこころの奥義を私たちに知らせてくださいました。それは、神が御子においてあ

## 五 新しい天地と古い天地

らかじめお立てになったご計画によることであって、時がついに満ちて、この時のためのみこころが実行に移され、天にあるものも地にあるものも、いっさいのものが、キリストにあつて一つに集められることなのです。このキリストにあつて、私たちは彼にあつて御国を受け継ぐ者ともなつたのです。私たちは、みこころによりご計画のままをみな実現される方の目的に従つて、このようにあらかじめ定められていたのです。

(エペソ人への手紙1章4〜11節)

このように神様の一方的な愛と恵みによつてイエス様を救い主と信じた者は、まだ肉体は古き創造の世界であるこの世に生きてはいても、すでに聖く傷のない者として新しい神の国を受け継ぐ相続者としての資格を与えられているのであります。

**新しい天地に入るためにはからだのよみがえりが必要**

それでは新しい聖なる御国に入ることができるとするには、聖められた霊を持つていれば肉体は古いままでもよいのでしょうか。それは許されません。新しく聖い御国に入るには肉体も新しく聖く造り変えられなければなりません。ではどのように造り変えられるので

ありましようか。イエス様はご自身の復活によって、イエス様を信じる者のからだもイエス様の復活体と同じような聖く、朽ちない、重力にも支配されない新しいからだに造り変えることができることを証明してくださったのです。そしてイエス様が天から迎えに来てくださるときに、すでに先に天に召され、その遺骨が墓の中に眠っているキリスト者のからだも、また、そのときに生きているキリスト者のからだも、一瞬のうちにイエス様の聖い復活体に似たからだに造り変えられ、イエス様とともに天に引上げられるのであります。パウロはイエス様を信じた者のからだが新しく造り変えられるときの状況についてテサロニケ人への手紙第一の中で次のように詳しく記しています。

私たちはイエスが死んで復活されたことを信じています。それならば、神はまたそのように、イエスにあつて眠つた人々をイエスといつしよに連れて来られるはずで、私たちは主のみことばのとおりに言いますが、主が再び来られるときまで生き残っている私たちが、死んでいる人々に優先するようなことは決してありません。主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下つて来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといつしよに雲の中に一挙に引き上げられ、

## 五 新しい天地と古い天地

空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

(テサロニケ人への手紙第一 4章14-17節)

こうしてイエス様を信じた者は、霊肉ともに完全にされて、新しい天と地に住むのにふさわしく整えられます。神様のご配慮は何と深く行き届いたものでありましょうか。

さてこのようにしてイエス様を信じた者が完全にされて天に引き上げられた後には、今のこの古い創造の世界は今までかつて人類が味わったことのない大患難のときを迎えるとヨハネの黙示録に記されています。そしてその期間は七年の間続くとあります。

主イエスは千年の間地上を統べ治められる

すでにイエス様が空中まで迎えに来てくださったって、よみがえりのからだを与えられたキリスト者たちは天に引き上げられ、この大患難に会うことなく天に留まっています。大患難の終わりに、イエス様がご自分に背き続けた者をさばくために地上に再臨され支配なさるときには、天に引き上げられたキリスト者もイエス様に従って地上に戻り、千年の間イエス様とともに地上の御国を支配すると聖書に記されています。この千年間は戦争もな

く、美しい自然も戻り、病気もなく、まったく平和な時代が続きます。この時代の平和に満ちた情景を預言者イザヤは次のように言い表しています。

狼は子羊とともに宿り、ひょうは子やぎとともに伏し、子牛、若獅子、肥えた家畜が共にいて、小さい子どもがこれを追っていく。雌牛と熊とは共に草を食べ、その子らは共に伏し、獅子も牛のようにわらを食う。乳飲み子はコブラの穴の上で戯れ、乳離れた子はまむしの子に手を伸べる。わたしの聖なる山のどこにおいても、これらは害を加えず、そこなわない。主を知ることが、海をおおう水のように、地を満たすからである。

(イザヤ書11章6～9節)

このときまで地上で人を惑わし、神様から引き離そうとし続けた暗闇の王であるサタンは、この間縛られて底知れぬ穴に投げ込まれ封印されていますが、その後で解き放たれ、このときになってもまだイエス様に反抗する人々を惑わして、イエス様とイエス様に従う者に対して最後の戦いを挑みます。しかしイエス様は天から火を降らせ、彼らを焼き尽くし、サタンと彼に従って最後までイエス様に反抗した者は火と硫黄の燃える池に投げ込まれ永遠に苦しみを受けます。

彼らは、地上の広い平地に上って来て、聖徒たちの陣営と愛された都とを取り囲んだ。すると、天から火が降って来て、彼らを焼き尽くした。そして、彼らを惑わした悪魔は火と硫黄との池に投げ込まれた。そこは獣も、にせ預言者もいる所で、彼らは永遠に昼も夜も苦しみを受ける。

(ヨハネの黙示録20章9～10節)

### 古い天地の破壊と新しい天地の創造

こうしてイエス様が地上の王として神様に背くサタンをはじめとしたすべての敵をさばいて滅ぼされたとき、イエス様は父なる神様に地上の御国を明け渡されます。ご自分が造られた古い創造に対する神様のご計画はこのようにして終了し、神様は古い世界を完全に破壊されます。

その日には、天は大きな響きをたてて消えうせ、天の万象は焼けてくずれ去り、地と地のいろいろなわざは焼き尽くされます。

(ペテロの手紙第二 3章10節)  
そこで私たちが心待ちにしていた新しい天と地がようやく到来するのです。この新しい

天と地がいかにすばらしいのかをヨハネはその黙示録で次のように言い表わしています。

私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下つて来るのを見た。そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってください。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。すると、御座に着いておられる方が言われた。見よ。わたしは、すべてを新しくする。」また言われた。「書きしるせ。これらのことばは、信ずべきものであり、真実である。」

(ヨハネの黙示録21章2〜5節)

古い今の世界は、罪の結果として生じた死や悲しみ、叫び、苦しみに満ちており、それから逃れることはできません。しかしそれらの苦しみは神様が造られる新しい国には何一つありません。神様から霊肉ともに聖なるものとされ、新しい天地に住む者には、父なる神様、御子イエス様に顔と顔を合わせてお会いし、永遠にとともに住み、仕えるという大き

## 五 新しい天地と古い天地

な栄光に満ちた喜び、楽しみだけがあります。御使いはヨハネに、「書きしるせ。これら  
のことは、信ずべきものであり、真実である」と保証しています。このようにイエス様  
を信じる者は、やがて今の世ととうてい比べることもできないすばらしい新しい天の都に  
おける祝福を味わうことが約束されているのであります。

イエス様を信じた者を主が迎えに来てくださる日が、いつかはわかりませんが、その日  
がそう先ではないことを今の世界の状況は明らかに物語っています。なぜなら聖書に預言  
されているご再臨の前兆と考えられる徴候が最近世界全体に急速に現われて来ているから  
です。私たちは主イエス様がいつ迎えに来てくださってもよいように、心を整えてそのと  
きの一日も早いことを祈りつつ主を待ち望む日々を生きたいと思います。



タンポポ

## 六 神の選びに与かる者

神は私たちを世界の基の置かれる前からキリストのうちに選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。神は、ただみこころのままに、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられたのです。

(エペソ人への手紙1章4〜5節)

### キリストのうちに選ぶ

今日はこのみことばから、神様の選びに与かるといふことはどういうことかをいっしよに考えたいと思います。このみことばには、神様が私たちが生まれるはるか前から、神の御子キリストによって罪に汚れた私たちを聖めてご自分の子にしようと予め選んでくだ

さつていたという、驚くべき事実が語られています。イエス・キリストによって聖くされ  
るとはいつたいうことなのでしょう。ここで次のみことばを味わってみましょう。

彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。

彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやさ  
れた。私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かつてな道に向かつて  
行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。

(イザヤ書53章5～6節)

神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、  
この方にあつて、神の義となるためです。

(コリント人への手紙第二 5章21節)

もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中から  
よみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。人は心に信  
じて義と認められ、口で告白して救われるのです。

(ローマ人への手紙10章9～10節)

この三つのみことばの中には、なぜ神様が私たちを聖めてくださるのか、その聖めはど

## 六 神の選びに与かる者

のようにしてなされるのが、よく記されていると思います。そしてこの事実を心からすなおに信じ受け入れた者を、神様は御子イエス様が十字架の上で流された尊い血によって聖めて救ってくださるのです。まさにこれは人知をはるかに越えた神様の愛のご計画であります。

なぜ多くの人の中から救いに選ばれたのか

しかし、すでにイエス様を救い主と信じている方々の中にも、今改めてなぜ多くの人の中から自分が救われたのか、多くの人の中から自分がイエス様を信じるようになったのかと不思議に思われる方が多いのではないのでしょうか。私たちが回りを見まわしたときに、自分よりも先に神様を選ばれるに相応しいと思われる高潔な、善良な、寛容な、親切な方々がたくさんおられます。自分よりも人格において、行ないにおいてはるかに勝れた人々がたくさんおられるのに、その方々がイエス様をまだ信じておらず、いつも自分のことばかり大切にしたり、良くないことを考えたり、行なったりして来たような私たちのほうが先に救われている、ということはどうしてなのか私たちにはまったくわかりません。しかし聖書には、だれが先に救われるかという選択は人間の基準によるものではなく、ま

つたく神様ご自身の意思によるものであると書かれているのです。

冒頭のみことばの中に、

神は、ただみこころのままに、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられたのです。

(エペソ人への手紙1章5節)

とあります。このように私たちが他の人々よりも先に救われたのは私たちに何か良い点があつたからではなく、また私たちが神様を愛していたからでもなく、一方的に神様がみこころのままに愛をもつて罪人である私たちを予め選んでくださったからなのであります。

神の選びは一方的な神の意思による

しかし、なぜ神様に愛されるのに相応しくない私たちのような者を神様が愛されるのでありましょうか。私たちにはわかりませんがパウロは神様のあわれみについてローマ人への手紙の中で次のように言っています。

神はモーセに、「わたしは自分のあわれむ者をあわれみ、自分のいつくしむ者をいつくしむ。」と言われました。したがって、事は人間の願いや努力によるのでは

六 神の選びに与かる者

なく、あわれんでくださる神によるのです。

(ローマ人への手紙 9 章 15 ～ 16 節)

パウロが言っているように、神様はただ一方的にご自分の意思であわれもうと思う者をあわれんでくださり、そのあわれみの対象に自分が選ばれたとしか言いようがないのです。また神様は預言者マラキに次のようにおっしゃいました。

「わたしはあなたがたを愛している。」と主は仰せられる。あなたがたは言う。「どのように、あなたが私たちを愛されたのですか。」と。「エサウはヤコブの兄ではなかったか。——主の御告げ。——わたしはヤコブを愛した。」

(マラキ書 1 章 2 節)

ヤコブはイサクとリベカの間生まれた双子の兄弟の弟であります。そして神様はヤコブがエサウの弟であることをご承知の上で、ヤコブを愛し、イスラエル民族の指導者として選ばれたのであります。神様はふたりがまだリベカの胎内にいるとき、リベカに兄のエサウが弟のヤコブに仕えるようになるとおっしゃっています。

イサクは自分の妻のために主に祈願した。彼女が不妊の女であったからである。主は彼の祈りに答えられた。それで彼の妻リベカはみごもった。子どもたちが彼女

の腹の中でぶつかり合うようになったとき、彼女は、「こんなことでは、いったいどうなるのでしょうか。私は。」と言った。そして主のみこころを求めに行った。すると主は彼女に仰せられた。「二つの国があなたの胎内にあり、二つの国民があなたから分かれ出る。一つの国民は他の国民より強く、兄が弟に仕える。」

(創世記25章21～23節)

聖書にはエサウとヤコブのふたりの行状が詳しく記されていますが、それによると、ヤコブは奇計を用いて兄や父をだましたりするような、ずる賢い性質を持っていた人間であるように思えます。そのようなヤコブをどうして神様がお選びになったのか私にはわかりません。しかし、私自身が救いの対象に選ばれたことを考えたときに、ヤコブを選ばれたのも、ただ神様の一方的なご意思によつたとしか考えようがありません。

### 主権者は神

私たちは人間中心にもの考える習慣がついています。人間に主権があると考えています。しかし聖書は主権は人間にあるのではなく、万物をお造りになり、それを支配しておられる神様にあるとはつきりと言っています。ですから神様が「わたしはヤコブを愛す

## 六 神の選びに与かる者

る」とおっしゃれば、その神様の仰せに従うのが正しいことなのであります。聖書では神様と人間の関係を陶器師と陶器にたとえている箇所がいくつかあります。ローマ人への手紙の中には次のような記述があります。

人よ。神に言い逆らうあなたは、いったい何ですか。形造られた者が形造った者に対して、「あなたはなぜ、私をこのようなものにしたのですか。」と言えるでしょうか。陶器を作る者は、同じ土のかたまりから、尊いことに用いる器でも、また、つまらないことに用いる器でも作る権利を持っていないのでしょうか。

(ローマ人への手紙9章20〜21節)

イエス様を信じた私たちは、ヤコブのように神様の一方的なあわれみの対象として選ばれたからこそ救われたのであります。そこで次のような疑問が出て来ます。それはまだイエス様を信じていない人々は神様に選ばれないのだろうかという疑問です。しかしそうではありません。神様のみこころはすべての人が救われることであると聖書は言っています。

神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。

(テモテへの手紙第一 2章4節)

ここで言っている真理とは、イエス・キリストであります。

## 神の選びの基準

では神様はどのような基準で先に救おうとする人をお選びになるのでしょうか。その答えも聖書にあります。

神の賜物と召命とは変わることがありません。ちょうどあなたがたが、かつては神に不従順であったが、今は、彼らの不従順のゆえに、あわれみを受けているのと同様に、彼らも、今は不従順になっていますが、それは、あなたがたの受けたあわれみによって、今や、彼ら自身もあわれみを受けるためなのです。なぜなら、神は、すべての人をあわれもうとして、すべての人を不従順のうちに閉じ込められたからです。

(ローマ人への手紙11章29～32節)

これはイスラエル民族の救いは、異邦人と言われているイスラエル民族以外の民族の救いよりも後になる理由が記されている箇所の一部であります。すなわち、今イスラエル人が、神様が救い主としてこの世に遣わしてくださったイエス様を救い主として認めないというかたくなな態度を取っているのは、彼らより先に異邦人があわれみを受けて救われる

## 六 神の選びに与かる者

ためであり、その後にはイスラエル人もあわれみを受けて救われるのであると云うのです。しかし、イスラエル民族と私たち異邦人の関係は、先に神様に選ばれて救われたキリスト者と、まだイエス様を受け入れていない方々の関係と同じであり、今まだ救われていない方々がいるのは後に救われるためであり、今神様に不従順なのは後に神様のあわれみを受けるためであると考えることができないのではないのでしょうか。なぜなら聖書はまた次のように言っているからです。

神は、私たちが御怒りに会うようにお定めになったのではなく、主イエス・キリストにあつて救いを得るようにお定めになったからです。

(テサロニケ人への手紙第一 5章9節)

このみことばのように、神様は私たちが怒りに会わせようとお定めになったのではなく、ひとり子のイエス・キリストによつて救いを得させようとお決めになっておられるのであります。

先に選ばれた者は神の計画のために召されている

そうすると、私たちが先に選ばれた理由は何でしょうか。それは神様のご計画の一端を

担うためであります。そのご計画とは次のようなものであります。

それは、神が御子においてあらかじめお立てになつたご計画によることであつて、時がついに満ちて、この時のためのみこころが実行に移され、天にあるものも地にあるものも、いっさいのものが、キリストにあつて一つに集められることなのです。このキリストにあつて、私たちは彼にあつて御国を受け継ぐ者ともなつたのです。私たちは、みこころによりご計画のままをみな実現される方の目的に従つて、このようにあらかじめ定められていたのです。

(エペソ人への手紙1章9〜11節)

神様のご計画とは、このように神様の定められた時が来たとき、すでに天に召された預言者たちも、まだ地上にいる者やすべての被造物も一つに集められて、キリストをかしらとして統一されることでもあります。そのご計画をみな実現される神様の目的のために私たちは予め選ばれて、救いに与かっているのであります。

人の人生は神のご計画の中にある

こうして考えてみますと、私たちの人生に起こつて来るすべてのことは、私たち人間の

## 六 神の選びに与かる者

意思に基づくものは何一つなく、みな神様のご意思によるものであることに気づきます。

私たちは人生が自分の計画によってではなく、神様のご計画によって、自分の力や知恵の働きによってではなく、神様の力が働いて、運命ではなく、神様のご意思によって進行して行くということを知るのであります。人間は自分を主権者として自分の人生の意義や目的を考えている限りは、少しうまく行けばすぐにうぬぼれて傲慢になり、また少し思うように行かなくなればたちまち失望してしまふ、そのような繰り返しを行なっているに過ぎない者なのではないでしょうか。しかし、自分の人生を神様のご計画の一部として捕らえたとき、はじめて生き生きとした意義を自分の生涯に見出だすことができるのであります。聖書に、

人の心には多くの計画がある。しかし主のはかりごとだけが成る。

(箴言19章21節)

とある通り、いくら私たち人間が限りある知恵と力でああしよう、こうしようとする計画を立てても、その通りにならないことは多くの方々も体験なさったことでしょう。実際に自分の人生の中で成るのは、神様のご計画だけなのであります。

## 私たちの信仰が実を結ぶために

さて、私たちキリスト者は、とかく自分が救われたことをもって満足してしまい勝ちですけれども、私たちが御子キリストの十字架によって神の子どもとして選んでくださった神様のお考えは、ただ個人の救いに止まるだけではありません。私たちは神様のご自身の遠大なご計画である神の国の完成のため、神様のご栄光が現わされるためのご計画の一部を神の子どもとされた私たちに担当させようとお考えになり、そのために選ばれているのだということをお救われた者として心にしっかりと覚える必要があります。これは考えられないほど光栄なことであります。イエス様は次のようにおっしゃっています。

あなたがたがわたしを選んだではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの實が残るためであり、……。

(ヨハネの福音書15章16節)

イエス様は、父なる神様から遣わされて滅び行く人々を救い出すという尊いご自分の仕事の一部を担当させようと、まず私たちを選び、神様のみこころを宣べ伝えるように任命

## 六 神の選びに与かる者

したとおっしゃり、さらに私たちを任命したのは私たちの伝道が実を結び、その実が残るためであるとおっしゃっています。またペテロの手紙第一には、

あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民です。それは、あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです。

(ペテロの手紙第一 2章9節)

とあります。私たちはイエス様のすばらしい救いのみわざを宣べ伝えるために選ばれたのであります。そんなことは自分にはとてもできないと思う方はたくさんいらっしゃるでしょう。そう思われるのは当然です。私たちの知恵や力でできるものではありません。しかし私たちがイエス様に信頼し、イエス様におゆだねすれば、イエス様ご自身が実を結ばせてくださいます。イエス様はぶどうの木と枝のたとえで、そのことを約束してくださっています。

わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。わたしはぶ

どうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中に  
とどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あな  
たがたは何もすることができないからです。

(ヨハネの福音書15章4〜5節)

### 神の招待に与かる者

さきほども申しましたように、神様のご計画の目的は神の国を完成し、そこで神様のご  
栄光がたたえられることでもあります。そして神様はその目的のために、ひとりひとりをお  
選びになり、招待し、神の子どもとして神様のご計画を遂行する任務の一端を与えてくだ  
さるのです。神様に選ばれたときに、招待されたときに、自分の自由意思によつて感謝し  
てこのご招待にお応えする決心をすれば、神様は私たちにキリストの義の衣を着せてくだ  
さり、私たちをご自分の子どもとしてくださつて、ご計画に参加する光栄ある任務を与え  
てくださいます。しかし、もし自分の意思で神様のご招待を拒めば、神の国の相続者には  
なれず、その人の救いは先に延期され、あくまで拒み続けた者は永遠の滅びに至ります。  
そして神様は代わりに他の人を選んで神の国に招待されるのです。イエス様はたとえをも

つて神様に招待される者のことを次のようにお話になっています。

イエスはもう一度たとえをもつて彼らに話された。「天の御国は、王子のために結婚の披露宴を設けた王にたとえることができます。王は、招待しておいたお客を呼びに、しもべたちを遣わしたが、彼らは来たがらなかった。それで、もう一度、次のように言いつけて、別のしもべたちを遣わした。『お客に招いた人たちにこう言いなさい。「さあ、食事の用意ができました。雄牛も太った家畜もほふつて、何もかも整いました。どうぞ宴会にお出かけください。』ところが、彼らは気にもかかず、ある者は畑に、ある者は商売に出て行き、そのほかの者たちは、王のしもべたちをつかまえて恥をかかせ、そして殺してしまつた。王は怒つて、兵隊を出して、その人殺しどもを滅ぼし、彼らの町を焼き払つた。そのとき、王はしもべたちに言つた。『宴会の用意はできているが、招待しておいた人たちは、それにふさわしくなかつた。だから、大通りに行つて、出会つた者をみな宴会に招きなさい。』それで、しもべたちは、通りに出て行つて、良い人でも悪い人でも出会つた者をみな集めたので、宴会場は客でいっぱいになつた。ところで、王が客を見ようとしてはいつて来ると、そこに婚禮の礼服を着ていない者がひとりいた。そこで、王は言つた。

『あなたは、どうして礼服を着ないで、ここにはいつて来たのですか。』しかし、彼は黙っていた。そこで、王はしもべたちに、『あれの手足を縛って、外の暗やみに放り出せ。そこで泣いて歯ぎしりするのだ。』と言った。招待される者は多いが、選ばれる者は少ないのです。』

(マタイの福音書22章1〜14節)

神様がはじめに招待された人々は、みな自分の都合で招待を断ったり、神様の招待状を持って神様から遣わされた預言者や、最後には神様の御子でさえ殺してしまつたので神様はそれらの人々を滅ぼされます。そこで神様はもっと多くの人々を宴会に招待されました。しかし招待に応じたたくさんの人の中で婚禮の礼服を着ていない人、つまりイエス様の十字架による義の衣を着ていない者は外に放り出されてしまう、というたとえであります。

神様はただ愛だけの方ではありません。全き愛と同時に全き義の神であります。神様はあわれみと恵みに富む方であると同時に厳しさに富む方でもあります。神様が私たちを恋慕ってお選びになつた理由は、私たちの能力や知恵がすぐれているから、あるいは行ないが良かったからではなく、むしろその逆であつて、私たちが愚かで、弱く、良い行ないなどできない自分を知っている者だからだったのであります。パウロはこれについてコリ

## 六 神の選びに与かる者

ント人への手紙第一の中で次のように言っています。

この世の取るに足りない者や見下されている者を、神は選ばれました。すなわち、有るものをない者のようにするため、無に等しいものを選ばれたのです。これは、神の御前でだれをも誇らせないためです。

(コリント人への手紙第一 1章28～29節)

すなおに神様の前に立ったとき、ほんとうに自分が弱い者、知恵も力もない者、誇るに足りない者であると思う方は、すでに神様に選ばれる資格を持っておられるのです。どうか、おひとりでも多くの方が、ご自分が神様の選びの対象とされていることに感謝し、「イエス様が与えてくださる救いの衣を着せてください」と神様のもとに出てください。いと心から願う次第です。また先に神様のあわれみを受けて救われた私たちも、高ぶって神に選ばれた自分を誇るのではなく、私たちのためにいのちを捨ててくださったほど私たちが愛してくださるイエス様を誇り、いつも神様の前にへり下り、神様、イエス様だけがご栄光を現わされるように、またそのためにすばらしい選びのご計画を宣べ伝える力が与えられるように、祈りながら歩むことこそ最も大切なのではないでしょうか。



ホタルブクロ

## 七 遺伝子の修復と霊の修復

あなたは正しすぎてはならない。知恵がありすぎてはならない。なぜあなたは自分を滅ぼそうとするのか。

(伝道者の書7章16節)

### 人間の知恵

伝道者の書は、たぐい稀な英知を神様に与えられたソロモン王によって書かれたと言われていますが、今日は伝道者の書の中のこの箇所から、神様が人間の知恵について与えられた警告を、ごいっしょに考えてみたいと思います。いったい、どうして人間に知恵があり過ぎてはならないのでしょうか。それはひとこと言えば、神様からご覧になって人間の知恵はたいへんに愚かだからであります。愚かな知恵は人間におごり高ぶりの思いを起

こします。そして自分の知恵に目が眩んで神様を恐れなくなり、自らを破滅に導くことを神様は警告してくださっているのです。

聖書のヨブ記には、人間の知恵についての次のような箇所があります。

神は知恵のある者を彼ら自身の悪知恵を使つて捕える。彼らのずるいはかりことはくつがえされる。

(ヨブ記5章13節)

このみことばを、自分自身の上に当てはめたり、世の中で起こるいろいろな問題に当てはめてみると、ほんとうに私たちの知恵は浅はかで愚かしいものであることがわかります。今日は、この神様の警告を、私が学んで来ました医学の中で、最近著しく進歩している遺伝子工学、遺伝子治療の研究に例をとつて考えてみたいと思います。

### 遺伝子工学の進歩

まずはじめに、最近の遺伝子工学の驚くべき進歩について少しご紹介します。ご存じのように、古くから一定の法則で親から子に気質や顔、形の特徴が伝わることはわかっていました。また家系調査によって色盲や血友病、ダウン症など、いくつかの病気も遺伝する

## 七 遺伝子の修復と霊の修復

ことがわかっていました。しかし、分子遺伝学の進歩によって、私たち人間のすべての形状や性質、すなわち、身体的な特徴や、左利き、爪を噛むなどのくせや、内臓の働きや、細胞の中の酵素の働きなど化学的な変化も、すべて暗号として刻み込んでいる遺伝子がそれを決定していることがわかって来ました。

この暗号情報は、私たち人間のからだの一つ一つの細胞の核の中にある二十三組のソーセージのような形をした染色体の成分である、DNAという物質でできた二重の長いらせん状の鎖の中にすべて含まれており、そのDNAの配列に何かの変化や欠陥が生じることによって、いろいろな病気が起こるのです。このDNAの鎖は一個の細胞が二個の細胞に分裂して増える過程で分離して、それぞれの細胞の中にまったく同じ構造の二重らせん鎖のDNAができます。このようにして遺伝情報を組み込んだDNAの鎖は正確に新しい細胞の中に複製され、こうして髪の毛や血液の細胞から精子や卵子などの生殖細胞に至るすべての細胞には、まったく同じ遺伝情報が含まれることになるのです。ですから、親のDNAの配列に何らかの欠陥があれば、その欠陥は、そのまま子どもに伝えられることになります。

## 遺伝子工学の人への適用

このように分子レベルでの遺伝子の研究が進みますと、昔から家系調査でわかっている遺伝病のほかに、心臓病、癌、高血圧、糖尿病、動脈硬化、アルツハイマー病など多くの成人病に罹かるリスクが、たった一個の細胞の中のDNAを調べるだけで、天気予報の確率より高い確率で予測することが可能になります。このような技術は近い将来いろいろな方面で使われることが予想されます。たとえば、生命保険に入ろうとする人の血液の一滴を調べて、その人が将来癌や心臓病などになるリスクが高いことがわかったときに、その人は生命保険に加入したくても断られたり、あるいは特別に高い保険料を要求されたりするということが起こるかも知れません。また、将来癌や心臓病になる確率が高いことが会社の採用時に調べられてわかれば、その人の採用にとって不利になるという事態が生じることも考えられます。また、この遺伝子診断が結婚のときに使われ、その結果によっては破談になることも起こって来るでしょう。このように簡単にDNAの検査によってその人の遺伝情報が他人に知られることが倫理的にもたいへん問題であることは、おわかりになると思います。

## 七 遺伝子の修復と霊の修復

それだけでなく、この遺伝子を操作して、ある種の遺伝病を治療しようという試みも行なわれるようになりました。この方法は欠損している遺伝子を正常な遺伝子と置きかえるというものですが、どのようにして置きかえるのかと言いますと、レトロウイルスというウイルスを使う方法によるものです。このウイルスには人の細胞に侵入して、人の細胞のDNAに自分の持っている遺伝情報を組み込むという変わった性質があるので、この性質を利用してウイルスに正常な遺伝子を運ばせ、遺伝病に罹っている人の欠陥遺伝子を正常な遺伝子に置きかえることによって治療しようというのです。しかし、このようにしてどんどんとDNAに手を加える技術が進んで行くことは、はたして人間に幸せをもたらすことになるのでしょうか。

少し前に、私は「ミューテーション」という小説を読んだことがあります。この小説はロビン・クックという医者が書いた近未来医学小説で、ミューテーションとは突然変異という意味です。その内容を要約してご紹介しますと、医者で分子遺伝学者の夫と精神科医の妻の夫婦が頭脳の優れた子どもを作ろうと計画し、自分たちの受精卵のDNAにレトロウイルスを使って神経成長因子という物質をたくさん作るような遺伝子を組み込みます。そしてお金を払ってある女性の子宮にその受精卵を入れて、その女性に自分たちの子を産

ませます。産まれた子が異常に知能の高い子どもであることがわかったとき、親は自分の計画が予想以上に成功したことを喜びます。しかし彼らはやがて、その子が年齢相応の子供らしい感情を持った子ではなく、感情の無い、良心がまったく欠落した、知能だけが高度に発達した恐ろしい子どもであることに気づきます。その子が何をしたかというとき、親の目を盗んで、密かに遺伝子工学装置を使って自分が親にされたと同じ遺伝子操作を行ない、自分と同じような改造人間をコピーして作り出そうという恐ろしい計画を進めるのです。それを知った父親は自分がたいへんな過ちを犯したことを後悔して、その子を殺し、自分も死ぬという、まったく恐ろしい内容であります。これはあくまで小説の話ですが、しかしまったくの空想物語ではなく、すでに私たち人間はその技術を手に入れており、今でもやろうと思えばできないことではないのです。しかし今は、遺伝子の操作は、精子、卵子および受精卵には行なってはならないという世界的な倫理規定があるために、止められているに過ぎません。

人間の好奇心は止まるところを知らない

一九八二年にアメリカで遺伝子治療は将来どうあるべきか、何をすべきで、何をしては

## 七 遺伝子の修復と霊の修復

いけないか、という会議が開かれました。その会議の記録を読みますと、いろいろな議論がなされている中に、ある学者が次のような問題提起をしていました。すなわち、「人に対して直接遺伝子の操作をするということは、人間の存在を脅かすことにならないだろうか、人間の種の自然な流れを変えることにならないだろうか、いったい人類は自らの遺伝的運命を勝手にデザインして変更するような重荷を引き受けるほど賢いと言えるだろうか」と言うのが彼の主張です。この発言は彼の良心が言わせたものであると思います。しかし、また別の学者は、「いかに研究に歯止めをかけようとしても、人間の好奇心はこれを止めることはできない。そもそも医学者、医学研究者というのは、基礎的な研究成果を治療に応用したいという欲求がたいへん強いので、研究を基礎の段階に止めておくというようなブレーキはかけられない。基礎的研究の成果を治療に使ってみたいという思いは、人間に生来備わった性質だから、それを変えることは不可能である」と言っております。いみじくもこの学者の発言は、人間の罪の本質である、とどまるところを知らない欲望を指摘したものであり、それほどに神様を無視した人間の知恵とはたいへんに恐ろしいものと言わざるを得ません。

## 人間の欲望が罪を生む

聖書では人間の欲望が罪を生み、罪が死を生むと書いています。

人はそれぞれ自分の欲に引かれ、おびき寄せられて、誘惑されるのです。欲がはらむと罪を生み、罪が熟すると死を生みます。

(ヤコブの手紙1章14～15節)

預言者エレミヤを通して神様は次のようにおっしゃっています。

人間に信頼し、肉を自分の腕とし、心が主から離れる者はのろわれよ。

(エレミヤ書17章5節)

「肉を自分の腕とし」というのは自分の思いで、知恵で何でもやろうとすることです。またダビデは次のように言っています。

罪は悪者の心の中に語りかける。彼の目の前には、神に対する恐れがない。

(詩篇36篇1節)

私たち人間が自分の知恵を誇り、自分の知恵に信頼して生きるときに、私たちに神を恐れる思いはまったくありません。これが悪者、すなわち創造主であるまことの神様を恐

れないという、おそろしい罪に生きる人間の姿です。ソロモンは次のように言っています。

人の子らの心は悪に満ち、生きている間、その心には狂気が満ち、それから後、

死人のところに行く。

(伝道者の書9章3節)

人間の心は神様からご覧になると、神様から離れ、狂気に満ちているのです。これが罪の中に生きる私たちの状態です。ですから遺伝子工学の研究も、その成果をうっかり人間に適用させることは狂気につながるのです。かつて湾岸戦争のときにアメリカのブッシュ大統領は、イラクのフセイン大統領のことを「彼はほとんど狂っている」と言ったそうですが、それはフセイン大統領に限りません。神様からご覧になると神様に背を向けた人間はだれもが狂気に満ちているような者なのであります。科学が進歩した結果として現われている今日の世界のさまざまな愁うべき状況や、私たちの身近に起こっている医学の進歩の状況を見つめるとき、私はいへんに恐ろしい気がします。

霊が正しく働かなくなった人間

神様は万物を創造されたとき、私たち人間をご自分に似る者とするために、ほかの生物

にはない特別な賜物として神様の息である霊を私たちのからだに入れてくださいました。神様がご自分の御霊を私たち人間の中に入れてくださって、はじめて人間は生きるものとなったのであります。ヨブ記には次のように記されています。

神の霊が私を造り、全能者の息が私にいのちを与える。

(ヨブ記33章4節)

神様が私たち人間にご自分の息を吹き込んでくださった目的は、私たちが神様と霊的な交わりができるためであり、私たち人間の霊が神様と霊的な親しい交わりを持つことによつて、私たちが神様の前に正しく生きるようになるためであります。ところが残念なことに、最初に造られたアダムをはじめとし、その子孫である人間はすべて、自分を造つてくださった神様に従うのではなく、自分の欲を満たすことを目的として、わがままに生きるようになりました。それはアダムが神様に背きの罪を犯した結果、せつかく神様が与えてくださった霊に欠陥が生じ、それが霊の遺伝子に刻み込まれて原罪となり、人間に代々受け継がれているためであります。このように、私たち人間が神様から離れ罪の中に生きる限り、その人間が手にした遺伝子分析や遺伝子操作の技術も、自分の欲を満たすためにしか用いようとしないうでしょう。そしてその結果は神様の警告通り、自らを滅ぼすことに終

## 七 遺伝子の修復と霊の修復

わるでしょう。

欠陥のある人間の霊を修復してくださる神

パウロはエペソにいるキリスト者に送った手紙の中で次のように言っています。

あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、そのころは、それらの罪の中にあつてこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従つて、歩んでいました。私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあつて、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生れながら御怒りを受けるべき子らでした。

(エペソ人への手紙2章1〜3節)

パウロの言うように、イエス様を信じない人はむろんのこと、イエス様を救い主と信じる以前のキリスト者もすべて、自分の肉の思いを中心に生きて来たのであり、そのような生き方は神様の怒りを受けて当然です。さきほど申しましたように、私たち人間の霊には最初の人アダムの霊に生じた欠陥が遺伝的に刻み込まれてしまつており、しかもそれは優性遺伝をしますから、どんな人でも罪という欠陥のある霊を持った人間として生れてしま

うのであります。この原罪という霊の欠陥遺伝子は、いくら遺伝子操作の技術が進んでも人間が修復することはできません。人間の霊は神様から与えられた息ですから、人間の手の及ばない領域、言いかえれば神様の領域に属するものであります。ですから、霊の欠陥は神様だけしか修復することがおできにならないのです。

では、その霊的欠陥はどのようにして修復されるのでしょうか。それは神様が私たちのところへ遣わしてくださった神の御子イエス・キリストによってであります。しかもその修復は、イエス様が十字架の上で流された聖い血と、復活のいのちの力によってなされるのです。イエス様は私たちの霊に生じた大きな欠陥部分をご自分の血と復活によって修復してくださり、修復された霊をイエス様の御霊と結びつけてくださいます。そのとき私たちの霊ははじめて神様のみところを知り、それを喜ぶという正しい働きをすることができるようになるのです。このようにして私たちに神様との正しい交わりが回復されるのです。

キリストが傷のないご自身を、とこしえの御霊によって神におささげになったその血は、どんなにか私たちの良心をきよめて死んだ行ないから離れさせ、生ける神に仕える者とするでしょう。

(へブル人への手紙9章14節)

霊が修復されたときに、人は知恵を正しく使うことができる。

私たちの霊がイエス・キリストのみわざによって修復され正しい働きをするようになったときに、はじめて私たちは知恵を正しく使うというのは人間のためではなく、神様に伝えるためなのだということを知らず。私たちは新しく修復された霊に与えられた正しい知恵によって、いかに神様の知恵が人間の浅はかな知恵では探り知ることのできない大きく深いものであるかということを知り、そのときにはじめて心から神様を恐れ敬うようになるのです。ソロモンは次のように言っています。

私は一心に知恵を知り、昼も夜も眠らずに、地上で行なわれる人の仕事を見ようとしたとき、すべては神のみわざであることがわかった。人は日の下で行なわれるみわざを見きわめることはできない。人は労苦して捜し求めても、見いだすことはない。知恵ある者が知っていると思っても、見きわめることはできない。というのは、私はこのいっさいを心に留め、正しい人も、知恵のある者も、彼らの働きも、神の御手の中にあることを確かめたからである。

(伝道者の書 8章16節～9章1節)

このみことばのように、霊が修復されたときに私たちははじめて人間の営みや働きもすべて神様の御手の中にあることを知ります。私たち人間が遺伝子に関する驚くべき仕組みを知ったのも、神様の知恵によってであったことをはじめて知ることができなのです。

もし私たちが神様を恐れ、神様の前にへり下って、神様から与えられた知恵や技術を神様のご用のために使えば神様は祝福してくださいます。遺伝子操作の技術そのものは悪ではなく、この技術を使う人間に問題があるのです。この技術を人間が自分の欲を満たす目的で使うときに、それが悪となるからであります。これは遺伝子工学に限りません。科学技術全体、いや学問全体に言えることではないでしょうか。聖書には次のようなみことばがあります。

主を恐れることは、知恵の初め。これを行なう人はみな、良い明察を得る。

(詩篇111篇10節)

神様を恐れることこそ知恵のはじめであり、私たち人間が神様を恐れて、みこころを問いつつ科学技術を用いれば、その技術によって身を滅ぼすことはないのです。

ですから、まだイエス様によって霊の修復をお受けになつていない方は、冒頭の神様の警告である「あなたは知恵がありすぎてはならない。なぜあなたは自分を滅ぼそうとする

## 七 遺伝子の修復と霊の修復

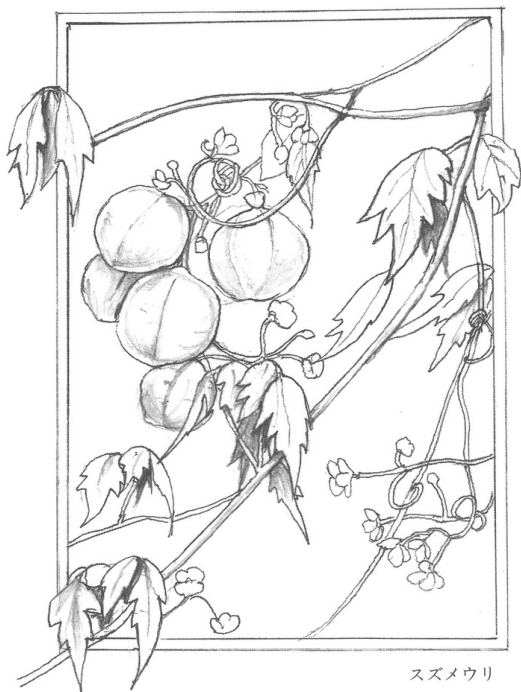
のか」というみことばを謙虚に心に受け止めていただき、神様から離れていることがいかに恐ろしいことであるかを知り、へり下って神の御子イエス様の前に出ていただきたいと思えます。そのときイエス様は喜んで即座にご自分のいのちによってあなたの欠けた霊を修復してください。イエス様は二千年前からその作業を始めてくださっているのです。詩篇三十三篇の中からみことばをお読みします。

全地よ。主を恐れよ。世界に住む者よ。みな、主の前におののけ。まことに、主が仰せられると、そのようになり、主が命じられると、それは堅く立つ。主は国々のはかりごとを無効にし、国々の民の計画をむなしくされる。主のはかりごととはこしえに立ち、御心の計画は世々に至る。幸いなことよ。主をおのれの神とする、その国は。神が、ご自身のものとしてお選びになった、その民は。

(詩篇33篇8～12節)

罪ある人間の知恵で立てる計画は破綻します。まことの生ける神様のご計画だけが永遠に堅く立つのです。霊の修復という人知をもって測り知ることのできないような、あわれみのみわざを神様はすでに成し遂げてくださり、私たちひとりひとりがその対象に選ばれているのです。私たちがその事実を修復された自分の霊によって知ることができたこ

とは、何という幸せなことでありましょうか。まだ神様のこの恵みをご存じなかつた方は一日も早く神様の御前に出られ、完全な霊の修復をお受けになりますように、心からお祈り致します。



スズメウリ



## 八 オリーブ油のつぼ一つ

預言者のともがらの妻のひとりがエリシヤに叫んで言った。「あなたのしもべである私の夫が死にました。ご存じのように、あなたのしもべは、主を恐れておりました。ところが、貸し主が来て、私のふたりの子どもを自分の奴隷にしようとしております。」エリシヤは彼女に言った。「何をしてあげようか。あなたには、家にとんな物があるか、言いなさい。」彼女は答えた。「はしための家には何もありません。ただ、油のつぼ一つしかありません。」すると、彼は言った。「外に出て行って、隣の人みなから、器を借りて来なさい。からの器を。それも、一つ二つではいけません。家にはいったなら、あなたと子どもたちのうしろの戸を閉じなさい。そのすべての器に油をつぎなさい。いっぱいになったものはわきに置きなさい。」そこで、彼女は彼のもとから去り、子どもたちといっしょにうしろの戸を閉じ、子どもたちが次々に彼女のところに持って来る器に油をついだ。器がいっぱいになったので、

彼女は子どもに言った。「もつと器を持って来なさい。」子どもが彼女に、「もう器はありません。」と言うと、油は止まった。彼女が神の人に知らせに行くと、彼は言った。「行って、その油を売り、あなたの負債を払いなさい。その残りで、あなたと子どもたちは暮らしていけます。」

(列王記第二 4章1〜7節)

今日は主に全き信頼を置くことの大切さと、主はその信頼に必ず応えてくださるという事実について、旧約聖書の中のこのエピソードからごいっしょに考えてみたいと思います。エリシャは紀元前九世紀に活躍した預言者エリヤの後継者であり、エリヤと並んでイスラエル初期の二大預言者のひとりと言われています。エリシャは「神の人」と呼ばれるように、心から神様に仕え、また神様から知恵と力をいただいて数々の奇蹟を行なった人ですが、このエピソードもエリシャの奇蹟の一つであります。

エリシャの時代にはほかにも何人かの預言者がいましたが、そのうちのひとりが天に召されました。主のみこころを伝えるために労して召されたこの預言者の後には負債だけが残りしました。貧しい預言者の家にはもはや負債を支払うために処分できるような金目のも

八 オリーブ油のつぼ一つ

のは何も残っていません。そこで債権者は預言者の妻に、ふたりの子どもを奴隸として売って負債を返せと要求しました。愛する夫を失い、ふたりの子どもを抱えてこの先どのよう生きていったらよいか途方にくれていたときに、大切な子どもまで売れと迫られた彼女の気持ちはどんなだったでしょう。追いつめられた彼女は他のだれにも相談することなく、まっすぐに亡き夫が信頼していたエリシャに救いを求めました。エリシャに叫んで言ったという言葉から、彼女の切迫した心の動きを窺い知ることができます。

相談を受けたエリシャが彼女に命じた処置は、冒頭のみことばにあるようなまったく常識外のものでした。しかし彼女はエリシャに言われた通り、家にたった一つ残ったオリーブ油のつぼから、子どもたちが隣近所から借りられるだけ集めて来た空のつぼに次々とオリーブ油を満たしました。彼女から、借りて来たすべてのつぼに油が満たされたという報告を受けたエリシャは、彼女に「その油を売って負債を返しなさい。その残りであなたと子どもたちは十分に生きて行けます」と言ったのです。

このエピソードにはイエス様とイエス様を主と信じる私たちの関係についてのたいへん大切な事柄が含まれているのではないのでしょうか。これからその一つ一つについてごいっしょに考えてみましょう。

## オリーブ油の入ったつぼ一つの意味するもの

まずこの預言者の家に残されていたのは、オリーブ油の入ったつぼ一つだけであったというのであります。オリーブ油は当時灯火用に、薬用に、食用に、あるいはまた王や祭司を聖め別つときのしるしに用いるものとして欠くことのできない油でありました。預言者の妻はすでに負債を返済するために、家の中の少しでもお金になるものはすべて売り払っていました。最後まで一つぼのオリーブ油だけは売らずに残しておいたのです。この世界的にみればたった一つぼのオリーブ油にどれだけの価値があるでしょうか。しかし彼女はこれを大切に残しておいたのです。もしこのオリーブの一つぼがなかったなら、エリシヤは彼女に何もしてやれなかったし、負債を返すために彼女は子どもを売らなければならなかったことを考えると、いかにこのオリーブ油の一つぼに価値があったかがわかります。私たちキリスト者にとって一つぼのオリーブ油とは何でしょうか。それはイエス様を信じた私たちの中に注がれた聖霊であり、信じる私たちの中に宿ってくださいているイエス様であります。そして私たちはその聖霊を、イエス様を入れていくつぼ、器であります。パウロは次のように言っています。

あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。

あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。

(コリント人への手紙第一 6章19〜20節)

私たちは、一つぼのオリーブ油が預言者の妻にとって最も価値のある宝となったこのエピソードから、イエス様を信じた者にとって、この世のどんな宝よりも大切な宝は、私たちの中に住んでくださる聖霊であり、イエス様であることを改めてしっかりと覚えていなければならないのです。パウロはイエス様のすばらしさに比べたら、ほかのものはすべて取るに足りないものだと次のように言っています。

私の主であるイエス・キリストを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損とと思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。

(ピリピ人への手紙3章8節)

全き信頼を置くことのできる方はどなたか

次に預言者の妻はエリシャの指示が常識を越えたものであったのにもかかわらず、少しも疑わずに、その指示にすなおに従ったということです。なぜ彼女はエリシャを疑わなかったのでしょうか。それは彼女がエリシャに全き信頼を置いていたからではないでしょうか。彼女はエリシャが神の預言者として自分を顧みることなく、心から神様と人々に奉仕している姿を身近に見てきました。彼女はその姿を通してエリシャの人格に全き信頼を置くことができました。この人ならば窮地に陥っている自分たちを救ってくれる、自分たちのために最善のことをしてくれるという確信を持っていたのです。

このことは私たちにマタイの福音書の八章に記されている、イエス様のみことばに信頼したローマの百人隊長の信仰を思い出させます。

イエスがカペナウムにはいられると、ひとりの百人隊長がみもとに来て、懇願して、言った。「主よ。私のしもべが中風やみで、家に寝ていて、ひどく苦しんでおります。」イエスは彼に言われた。「行って、直してあげよう。」しかし、百人隊長は答えて言った。「主よ。あなたを私の屋根の下にお入れする資格は、私にはあり

ません。ただ、おことはをいただきかせてください。そうすれば、私のしもべは直りますから。」

(マタイの福音書8章5〜8節)

イエスは、これを聞いて驚かれ、ついて来た人たちにこう言われた。「まことに、あなたがたに告げます。わたしはイスラエルのうちのだれにも、このような信仰を見たことはありません。」

(マタイの福音書8章10節)

それから、イエスは百人隊長に言われた。「さあ行きなさい。あなたの信じたとおりになるように。」すると、ちょうどその時、そのしもべはいやされた。

(マタイの福音書8章13節)

預言者の妻は身も心も神にささげているエリシャを見て彼を信頼しました。ローマの百人隊長はイエス様のうわさを聞いただけでイエス様を信頼することができました。いっばう私たちは御霊の啓示によって、ご自分のいのちを私たちの罪を贖うために神様にささげてください。イエス様によってイエス様がどんなに私たちを愛してくださいるかを知ることができました。しかしそのような恵みをいただいている私たちは、はたして預言者

の妻がエリシャの言葉に少しの疑いも抱くことなく信頼したように、また百人隊長がイエス様を信頼したように、イエス様に信頼しているでしょうか。

私たちの罪の負債は何によつて支払われたか

三番目は、預言者の妻はオリブ油を売った代価で負債を払うことができ、さらにその残りで生きて行けたということであります。彼女には債権者に負債を返済する力はまったくありませんでした。そのことを知っていた彼女は、ただ信頼する神の人エリシャに救いを求めるだけでした。しかしそれが最善の方法であつたのです。このことは神様に犯した人間の罪の負債はどのようにして返済できるのだろうかという問題に対する解決の道を指し示しています。

罪とは神様のみこころ、ご意思に背くことです。神様のご意思は律法や良心によつて具體的に私たちに示されているのですが、私たちが心を謙虚にして「自分は形式的、表面的にはなく、心から律法に、良心に従うことができるだろうか」と考えたときに、どうしても自分の意志の力では律法や良心に従うことはできないことを知ります。パウロが次のように言っている通りです。

## 八 オリーブ油のつば一つ

律法を行なうことによっては、だれひとり神の前に義と認められないからです。律法によつては、かえつて罪の意識が生じるのです。

(ローマ人への手紙3章20節)

このように人間の力ではどうすることもできない神様に対する罪の負債は、罪咎のまったくない神の御子イエス様が十字架の上で流された尊い血潮とその死によつてのみ返済することができるのであります。

神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあつて、神の義となるためです。

(コリント人への手紙第二 5章21節)

預言者の妻がオリーブの油で負債を返済することができ、さらにその残りで生きて行けたということは、私たちがイエス様のいのちによつてのみ罪の負債を神様に返済することができること、さらにイエス様のみわざによつて罪の負債を返すことができた者の中に住んでくださるイエス様は、ご自分を信じる者が生きるのに必要なものはすべて与えて養つてくださる方であることを示すものであります。パウロが、ピリピ人への手紙の中で、

私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって、あなたがたの必

要をすべて満たしてください。

(ピリピ人への手紙4章19節)

と言っている通りです。

### 空のつばになることの必要性

四番目は、エリシャに言われた通りに預言者の妻は子どもたちに次々に空のつばを運ばせ、空のつばがなくなるまで最初のつばからオリーブ油を注ぎ、オリーブ油はそのすべてのつばを満たしたということであります。空のつばとは聖霊を満たしていたくために霊的に整えられたキリスト者の姿を意味します。霊的に整えられた者は自分の器の中を自分の思いでふさいでしまわず、空にして、そこにイエス様が、聖霊が、満ちてくださることを願います。そのように整えられた器こそ主が用いてくださる器であり、聖霊の油が注ぎ満たされるつばであります。そして神様はどのように満たされた器から次々と神様を求め人々の心に御霊を注ぎ、救いへと導かれるのであります。

オリーブ油は当時のイスラエル人にとっては灯火用に、食用に、薬用に、聖別用に使うために必要な油でした。しかし霊的なオリーブ油はそれとは比較できないほど必要であり

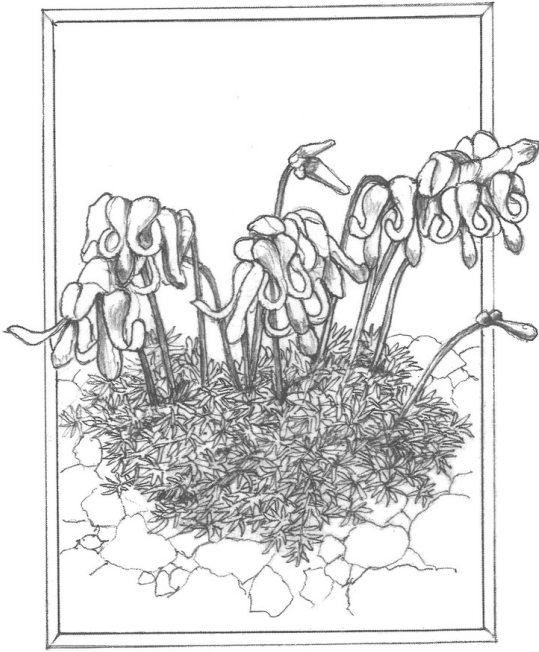
ます。なぜならイエス様および聖霊は、霊的な灯火の油として、霊的な食用油として、霊的ないやし油として、霊的な聖別の油として、私たちにとって最も必要だからであります。そしてこの預言者の妻の取った態度は、とりもなおさず私たちキリスト者にイエス様のしもべとして取るべき態度を示しているのだと思います。イエス様は次のようにおっしゃっています。

イエスは立って、大声で言われた。「だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。」これは、イエスを信じる者が後になってから受ける御霊のことを言われたのである。

(ヨハネの福音書7章37〜39節)

私たちはいつも自分という器を聖霊によって満たしていただいでいるでしょうか。私たちは私たちの中のイエス様、聖霊の働きを妨げないように、イエス様、御霊をお入れしているただの器に過ぎないものであることを自覚して、主の御前にへり下っているでしょうか。もしそうであればイエス様ご自身が、聖霊自らが、器としての私たちを通して豊かに働かれ、多くの飢え渴いたたましいを永遠のいのちの水で潤し、満たしてくださいさるのです。

最近の世の中に起こっているあらゆる徴候から、私たちは聖書が言っている通りにイエス様のご再臨が迫っていることを感知することができます。このときこそ私たちはイエス様を満たすつば、器としての自分をイエス様におささげして生きるべきではないでしょうか。



コマクサ



## 九 報われる忍耐

あなたが、わたしの忍耐について言ったことばを守ったから、わたしも、地上に住む者たちを試みるために、全世界に来ようとしている試練の時には、あなたを守ろう。

(ヨハネの黙示録3章10節)

### この世の人の忍耐とキリスト者の忍耐

今日はイエス様のおっしゃったこのみことばから、信仰生活における忍耐とはどのようなものかということについて、ごいっしょに考えたいと思います。

私たちは、昔から忍耐しなさい、我慢しなさい、しんぼうしなさいという言葉で、自分が生きてゆく上で必要な教訓として教えられて来ました。この忍耐は自分の力で頑張っ

耐え忍ぶというもの、また何のたしかな希望もないままにただ耐え忍ぶというものであります。このような忍耐は私たちの人格を形成する上においてたしかに大切なことであり、必要なことでありましょう。しかし忍耐にはもう一つ大切な別の忍耐があります。それはこの世の人の忍耐ではなく、神に属している者の忍耐であります。

イエス様を、自分の罪を贖ってくださいと救い主として信じ受け入れた者は、イエス様が、

わたしがこの世のものではないように、彼らもこの世のものではありません。

(ヨハネの福音書17章16節)

とおっしゃった通りに、それまで属していたこの世から、神に属するものへと移されます。イエス様は神様でありながら人となつて、父なる神の御座からこの世に來られた方ですから、当然この世に属するものではありません。そしてイエス・キリストの十字架の救いを信じる者も、イエス様の御力によって、この世に属するものから神に属するもの、イエス・キリストに属するものに移されたので、もはやこの世のものではないのです。

しかし、もはやこの世のものではなく、神に属するもの、キリストのものとしてされた者がどうしてまだ、この世に置かれていのでしょうか。それはイエス様が父なる神様に、

あなたがわたしを世に遣わされたように、わたしも彼らを世に遣わしました。

(ヨハネの福音書17章18節)

とおっしゃったように、キリストのものとされた私たちは、父なる神様がイエス様をこの世に遣わされたように、福音を伝えるためにイエス様によってこの世に遣わされているからです。

またパウロは、キリストを信じる者は自分のためではなく、自分のために死んでくださったイエス様のために生きることであると、次のように言っています。

キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです。

(コリント人への手紙第二 5章15節)

もし、私たちが心からこのように思うことができれば、私たちの生きる目的はもはや自分のためではなくなり、主のために、主からこの世に遣わされた者として生きるようになります。

けれども主のために生きると、口で言うのは簡単ですが、実行することは決して容易ではありません。むしろ主に忠実に従おうとすればするほど、自分の肉にとっては厳しく、

自分に対しても他人に対しても、忍耐することの多い日々であることを覚悟しなければならぬでしょう。しかも主のしもべである私たちの忍耐はイエス様が必要とされていることなのであります。ではイエス様が私たちに忍耐を必要とされるのは、どんな理由からでありますでしょうか。

### 一、主のしもべの忍耐は信仰の成長のために必要

第一は、私たち主のしもべの信仰の成長のためにであります。ペテロは次のように言っています。

罪を犯したために打ちたたかれて、それを耐え忍んだからといって、何の誉れにもなるでしょう。けれども、善を行なっていて苦しみを受け、それを耐え忍ぶとしたら、それは、神に喜ばれることです。あなたがたが召されたのは、実にそのためです。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残されました。

(ペテロの手紙第一 2章20～21節)

「善を行なう」とは、主のために生きることであり、具体的にはイエス様のしもべとし

て、主に従って福音を宣べ伝えること、イエス様の証し人として生きることでありませう。「主のしもべはそのために苦難を受けることがあっても、主イエス様を模範として忍耐しなさい」とペテロは言っているのです。またヤコブは、

私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。信仰がためされると忍耐が生じるということ、あなたがたは知っているからです。その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは知っているかたところのない、成長を遂げた、完全な者となります。

(ヤコブの手紙1章2〜4節)

と言っています。イエス様は主のしもべである私たちの信仰を成長させ、ご自分に似た者に育てようと、さまざまな試練を与えて、忍耐する訓練をしてくださるのです。しかし、ただ単に忍耐だけを要求しておられるわけではありません。その忍耐によって、主のしもべである私たちは勝利すると約束してくださっています。イエス様は次のようにおっしゃいました。

わたしの名のために、みなの方に憎まれます。しかし、あなたがたの髪の毛一筋も失われることはありません。あなたがたは、忍耐によって、自分のいのちを勝ち

取ることができます。

(ルカの福音書21章17〜19節)

「髪の毛一筋も失われることがない」という意味は、肉体のいのちが失われることがないということではなく、霊的いのちのことでもあります。主イエス様のために生きる者は、そのためにどんなに迫害を受けることがあっても、主からいただいた永遠のいのちは決して奪われることはないといエス様は約束なさっているのです。

わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。わたしに彼らをお与えになった父は、すべてにまさって偉大です。だれもわたしの父の御手から彼らを奪い去ることはできません。

(ヨハネの福音書10章28〜29節)

このようなたしかな約束をいただいているからこそ、私たちは忍耐することができます。

二、忍耐はご再臨を待ち望むために必要

第二は、私たち主のしもべが主のご再臨を待つためであります。ヤコブは次のように言っています。

こういうわけですから、兄弟たち。主が来られる時まで耐え忍びなさい。見なさい。農夫は、大地の貴重な実りを、秋の雨や春の雨が降るまで、耐え忍んで待っています。あなたがたも耐え忍びなさい。心を強くしなさい。主の来られるのが近いからです。

(ヤコブの手紙5章7〜8節)

また、ヘブル人への手紙の中には次のように書かれています。

あなたがたが神のみこころを行なつて、約束のものを手に入れるために必要なのは忍耐です。「もうしばらくすれば、来るべき方が来られる。おそくなることはない。」

(ヘブル人への手紙10章36〜37節)

主のしもべの忍耐は、無限になされなければならないではありません。主イエス様が

私たちを迎えに来られるそのときまでのことであります。そして私たちはその日がいよいよ迫っていることを、最近の世界の情勢から知ることができます。このように私たちには主のご再臨という大きな希望があるがゆえに試練を、迫害を耐え忍ぶことができます。イエス様もヨハネに次のように約束しておられます。

見よ。わたしはすぐに来る。この書の預言のことばを堅く守る者は、幸いである。

(ヨハネの黙示録22章7節)

### 主のしもべが忍耐するための原動力

では信仰の歩みにおける忍耐は何の力によってなされるのでありましょうか。主のしもべである私たちは、何に忍耐の原動力を求めたらよいのでしょうか。

#### 一、新しく生まれ代わった霊

第一に、新しく生まれ代わった霊が必要です。主のしもべの忍耐は、信じる前の自分が持っていた古い肉の力するものではありません。イエス様を救い主として信じる者は、イエス様の十字架の贖いによって、罪のゆえに死んでいた霊を生き返えらせていただいたこ

とを知っています。その新しい霊の力で忍耐するのであります。イエス様は、このことを良い地に落ちた種にたとえて、次のようにおっしゃいました。

良い地に落ちるとは、こういう人たちのことです。正しい、良い心でみことばを聞くと、それをしっかりと守り、よく耐えて、実を結ばせるのです。

(ルカの福音書 8 章 15 節)

ここにある正しい良い心とは、信仰によって生まれ代わった霊のことです。生まれ代わった霊は、みことばをしっかりと守り、それによって忍耐することができます。

## 二、霊の訓練

第二に、主のしもべの忍耐には、患難、試練を通しての霊の訓練が必要です。

「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」訓練と申って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるでしょうか。

(ヘブル人への手紙 12 章 5 ～ 7 節)

生まれ代わったばかりの私たちの霊は、このみことばのように主の愛に満ちた訓練によって育てられ、強くされ、成長します。私たちの忍耐は、こうして訓練され、強められた霊によってなされるものです。

三、からだのよみがえりの希望

第三に、主のしもべの忍耐には、主のしもべのからだのよみがえりの希望が必要でです。パウロはこれについて次のように言っています。

御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にしているただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます。私たちは、この望みによって救われているのです。目に見える望みは、望みではありません。だれでも目で見ていることを、どうしてさらに望むでしょう。もしまだ見えないものを望んでいるのなら、私たちは、忍耐をもって熱心に待ちます。

(ローマ人への手紙 8章 23～25節)

ここで言っている「まだ目で見えないもの」とは、からだの贖われること、すなわちからだのよみがえりを指しています。からだのよみがえりは、主のしもべの大きな希望で

あります。パウロはからだのよみがえりについて、次のように言っています。

私たちは土で造られた者のかたちを持つていたように、天上のかたちをも持つのです。兄弟たちよ。私はこのことを言っておきます。血肉のからだは神の国を相続できません。朽ちるものは、朽ちないものを相続できません。聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみなが眠ってしまうのではなく、みな変えられるのです。終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。

(コリント人への手紙第一 15章49～52節)

私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。

(ピリピ人への手紙3章20～21節)

私たちの朽ち果てるべきからだだが、やがてキリストの復活のからだと同じような朽ちない、聖いからだによみがえらされること、そして、その日は間近いというたしかかな希望は

この世に置かれた私たちの忍耐に大きな力を与えるものであります。

### 信仰における忍耐の手本

信仰における忍耐の手本は聖書にたくさん見られますが、ここにその何例かを挙げてみようと思います。

#### 一、イエス様

まず第一に、私たちの主イエス様であります。ヘブル人への手紙には次のように記されています。

信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをもともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。あなたがたは、罪人たちのこのような反抗を忍ばれた方のことを考えなさい。それは、あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないためです。

(ヘブル人への手紙12章2～3節)

私たちが信仰の試練に遭ったとき、私たちの霊が元気を失わないためには、イエス様が神の御子でありながら私たちの罪を贖い、永遠に生きる者とするためにどんなに忍耐してくださいましたか、そしてまた私たちのためにどんなに十字架のはずかしめを忍んでくださいましたかを思い起こすことです。そしてその主イエス様から霊の目を離さないでいることです。パウロは私たち主のしもべのために、このキリスト・イエスの忍耐を持つようにと祈っています。

どうか、主があなたがたの心を導いて、神の愛とキリストの忍耐とを持たせてくださいますように。

(テサロニケ人への手紙第二 3章5節)

二、預言者たち、ヨブ、モーセ

また、ヤコブは多くの預言者たちやヨブの忍耐も、私たちの忍耐の模範であると言っています。

苦難と忍耐については、兄弟たち、主の御名によって語った預言者たちを模範にしながら。見なさい。耐え忍んだ人は幸いであると、私たちは考えます。あなたが

たは、ヨブの忍耐のことを聞いています。また、主が彼になさったことの結末を見たのです。主は慈愛に富み、あわれみに満ちておられる方だということですよ。

(ヤコブの手紙5章10～11節)

ヨブの忍耐とは、神様からヨブに試練を与えることを許されたサタンによって、ヨブが子どもたちや財産のすべてを失い、その上自分も体中悪性の腫物に侵されるといふ試練に遭ったときの彼の忍耐を指しています。ヨブは災いを受けたとき、次のような態度を取りました。

このとき、ヨブは立ち上がり、その上着を引き裂き、頭をそり、地にひれ伏して礼拝し、そして言った。「私は裸で母の胎から出て来た。また、裸で私はかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。」ヨブはこのようになっても罪を犯さず、神に愚痴をこぼさなかった。

(ヨブ記1章20～22節)

ヤコブは「見なさい。耐え忍んだ人は幸いである」と言っています。なぜなら、神様がヨブになさったことの結末を見れば、神様は慈愛に富み、あわれみに満ちた方で、ただ単に忍耐だけを求めておられるのではなく、忍耐には報いてくださる方であることがわかる

からであります。ヨブは忍耐の報いとして、主なる神様を霊の目で見る事ができました。それまで自分は神様の前に義人であると自認していたヨブは、そのとき次のように言いました。

私はあなたのうわさを耳で聞いていました。しかし、今、この目であなたを見ました。それで私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔い改めます。

(ヨブ記42章5、6節)

モーセの忍耐も私たちの模範です。

信仰によって、彼は、王の怒りを恐れなくて、エジプトを立ち去りました。目に見えない方を見るようにして、忍び通したからです。

(ヘブル人への手紙11章27節)

なぜ彼は忍び通すことができたのでしょうか。彼の忍耐の原動力は何なのでしょうか。今のみことばの少し前から読みますと、

信仰によって、モーセは成人したとき、パロの娘の子と呼ばれることを拒み、はかない罪の楽しみを受けるよりは、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。彼は、キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる大きな富と

思いました。彼は報いとして与えられるものから目を離さなかつたのです。

(へブル人への手紙11章24～26節)

と記されています。モーセが「報いとして与えられるものから目を離さなかつた」とあるように、信仰における忍耐には報いが約束されているのです。ではその報いとは何でしょうか。それは永遠のいのちという冠であります。

試練に耐える人は幸いです。耐え抜いて良しと認められた人は、神を愛する者に約束された、いのちの冠を受けるからです。

(ヤコブの手紙1章12節)

主に背負われ、抱かれながら行なうキリスト者の忍耐

ここで私たちがはつきりと覚える必要があることがあります。それは主を信じる者が忍耐するとき、主は必ずともにてくださるということです。主は私たちの弱さをもよくご存じですから、私たちの忍耐の限度を越えてまで忍耐することを求めてはおられません。パウロが次のように言っている通りであります。

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真

実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。

(コリント人への手紙第一 10章13節)

預言者イザヤは、主のしもべが苦しむときに、主はどうしてくださるかを次のように記しています。

彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、ご自身の使いが彼らを救った。その愛とあわれみによって主は彼らを贖い、昔からずつと、彼らを背負い、抱いて来られた。

(イザヤ書63章9節)

主の愛とあわれみの何と深く大きいことでしょうか。このように主のために生きるしもべは、忍耐のときにもイエス様という完全な脱出の道が与えられ、そのイエス様の深い愛の中に包まれ、背負われ、抱かれながら、忍耐の訓練を行なうのであります。

以上に述べて来ましたように、信仰における忍耐とは、主のしもべとされた者が主のために生きるために迫害や試練に遭っても、心を乱すことなく、絶望することなく、自分を

守ってくださいる主イエス様に堅く信頼して、希望と勇気を持ち続けて耐え忍ぶことであります。ダビデは次のように言っています。

私のたましいは黙って、ただ神を待ち望む。私の救いは神から来る。神こそ、わが岩。わが救い。わがやぐら。私は決して、ゆるがされない。

(詩篇62篇1〜2節)

主のしもべの忍耐は、この世に属する人々のように、自分の力で、たしかな希望もなく、ただただ我慢するという、つらい忍耐ではありません。ですから冒頭のみことばにあるように、「全世界に來ようとしている試練のときにも守る」と約束してくださいるイエス様に信頼し、抛り頼むことによって、何があっても報われる忍耐の道を、目指す天の御国のゴールに向かって歩んで行きたいと思えます。



アザミ



## 十　いのち長き時代に生きるために最も必要なこと

私たちの齢は七十年。健やかであつても八十年。しかも、その誇りとするところは  
は労苦とわざわいです。

(詩篇90篇10節)

### 平均寿命の伸び

九月十五日は敬老の日です。医学医療の進歩、社会福祉や生活の質の向上などによって日本人の寿命はずいぶん延びてきました。この頃町を歩いていると、とくに昼間などはお年寄りの姿ばかりが目につきます。厚生省の統計によると、わが国の平均寿命は一九九六年では男七七・〇一年、女八三・五九年で、今や世界一の長寿国です。これが二〇五〇年にはさらに男が七九・四三年、女が八六・四七年に達すると推定されます。六十年前の一

九三五年では男四二・〇六年、女四三・二〇年でしたから、六十年間で男は三五年、女は四十年寿命が伸びたことになり、これもまた世界一の伸び率であります。こういうわけで四五年前の一九五〇年には六五才以上の人口は全人口の五パーセントに過ぎませんでした。一九九五年には全人口の一四・五パーセントに増加し、三五年後にはなんと全人口の四分の一が六五才以上の老人で占められるようになると予測されています。かつて中国の杜甫という詩人は、詩の中で人生七十古来希と歌いましたが、それからとった古希、すなわち七十才の人は、今日ではまれどころか、ざらに見られるようになったのです。

### いのち長き時代に生きる

ではこのような、いのち長き時代に生きるお年寄りは、みな何の心配もなく長生きをしていることを喜び、その人生をエンジョイしているでしょうか。

一九九七年の一月から八月までA新聞に「いのち長き時代に」という特集が連載されました。いのち長き時代に生きるお年寄りたちの抱える悲しみ、嘆きが生々しく取材されているこの記事が主張しているのは、長生きするということが、お年寄りが生きるということが、ほんとうにたいへんなことだということです。記事の中からいくつかの事例をご紹介します。

介したいと思います。

その一 妻に連れられて、七十六才のじいちゃんが相談室にやってきた。相談室に来たとき、ぼけの症状は中等度に進んでいた。精神科のA医師の前に、二人は並んで座った。妻は嘆いた。「ぼけたから、デイ・ケアーに行ってくれたらいいのに、言うことをきいてくれんです」A医師がとりなした。「だれでも、ぼけることであるんですよ。偉い人でも長生きすりゃ、ぼけるしねえ」そして続けた。「奥さんだって、ぼけるかも知れませんよ」無表情だったじいちゃんが、A医師の言葉に反応した。顔をさっと赤くして、唐突に言い放った。「そしたら、ざまみろと言つてやりますわ」意外な言葉に、妻は驚いた。しかしA医師は、そのひと言の意味を理解した。A医師は妻をおいて、じいちゃんと話し始めた。「物忘れについて、奥さんから何か言われることは、ありませんか」「ある」「しかられている感じですね」「そうだ」「ぼけたこと、まわりに知られたくないですよね」「ああ」呼び水に誘われるように、じいちゃんは心の内を語り始めた。「物忘れして、情ないことですね。今までのように話せんようになって。仲間うちに出るとつらいもんで、外にも出なくなりまして」夫の言葉を、妻は目を見張るように聞いた。ひどい言葉を浴びせてきたわけではない。でも、ささいな言動が夫にくやしい思いをさせていたのだ。そんな

ことは考えもしなかった。「もう何もわからなくなったと思っていました」妻はぼつりと医師に言った。

その二 八十五才になるふみさんは、地区の婦人会長をつとめてきた。だが、十年ほど前から物忘れが目立つようになった。「近ごろ、物忘れがひどうていけんわ」毎日のように嘆いた。「年なんだから仕方ないよ」息子夫婦は母親を慰めた。ふみさんも「そうだねえ。忘れるの当たり前だわね」と答えていた。淡々とした表情に、表向きは見えた。この痴呆老人のデイケア施設では、通ってくる痴呆老人に作文を書いてもらう試みを始めた。ふみさんは、自分がほけることに対する心の内をつづった。彼女の痴呆は、自分がいま言ったことも忘れてしまうほどに進んでいたが、何とか文を書き切った。「物忘れがひどく、自分ながらこれからどうなる事かと心配で、たまらない毎日がつづいておりました。小学校のときは物おぼえが良く、おまえには何も話せんと、よく祖父に言われました。物忘れが気にかかり、夜はおそくまで眠れませんでした。私はもうこれで何もできなくなるのかと悲しく、夜寝ると涙が流れて困ってしまいました。これからの人生をどげしますだ」痴呆のお年寄り自身が、ほけるつらさをつづった文は、施設の職員を驚かせた。その気持ちをおもわかっていなかった施設の医師は打ちのめされた。専門家にも容易にうかがい知

れなかった痴呆老人の内面。それは不安や悔しさが混ざりあった、深い悲しみだという。今は元氣なお年寄りたちも、老いていく不安と戦っている。だが、老人たちの心模様は周囲には、なかなか見えてこない。

その三 若いころから「おしゃれの清さん」と呼ばれた。八十をすぎても独り暮らしを続け、みんなに感心された。ほかの年寄りとは違うという自負があった。だが、「若い」は容赦なくやって来る。ある日、自宅から、行きつけの喫茶店まで、いつものようにペダルを踏んでいた。気づいたときは路上に転んでいた。足をついたのに、片足で体重を支えられなかった。自転車に足がからまって起き上がれなかった。通行人に助け起こされたとき、八十九才の清さんは「自転車はもう無理や」と思った。この年で自転車に乗れることは自慢だった。本屋へ、スーパーへ、毎日出かけた。通りがかりの人が自分を振り返る視線さえ感じた。その自慢の「足」を、あきらめなくてはならない。きのうまでできていたことが、今日からできなくなる。これが老いなのかと、寂しくて、だれもない家で泣いた。足腰はすっかり弱っていた。長女が手押し車を買ってくれた。でも、腰の曲がったおばあさんの買い物が頭に浮かび、どうしても使えぬ気にならなかった。外に出るときは、車いすが必要になった。目も耳も衰えた。ますます追いつめられ、自分の殻に閉じこもつ

た。思わず口走ったこともある。「生きていても仕方ない」「死んでしまいたい」ずいぶん涙をこぼした。それでも外では見えを張って「幸せ」をつくらった。

### 高齢者虐待

また今年の八月二十七日付のA新聞には、家庭でのお年寄り虐待という見出しで、大阪老人虐待研究会が家庭内での高齢者虐待について全国調査をした結果が出ていました。虐待の内わけは日常の世話の放棄、身体的虐待、心理的虐待、経済的虐待などであり、男性の場合は妻から虐待を受けている例が半数近くで、「自分も我慢してきたのだから、夫も我慢するのが当たり前」という意識で、自覚がないまま夫を虐待しているケースが多く、また女性の場合は息子の妻からの虐待が三分の一に上るといふことです。虐待されている高齢者は、知れたら怖い、見放されたら困る、家を離れたくない、と言った理由で、虐待されても、あきらめたり、虐待されていることを隠したりしており、ほとんどの人は訴えたり、助けを求めたりはしていません。この記事には虐待の内容や程度には触れていないので、具体的にどのような虐待かはわかりませんが、老いて心身が衰えたために頼るべき家族からも厄介者扱いにされて、いじめや、迫害を受けて心が傷つき、恐れ

たり、悲しんだりしているお年寄りが少なくないことを知って慚然とさせられます。

### 長生きは労苦とわざわい

このような実情を知ると、私たちがこれまで漠然と長生きは幸せと考えていたことは当たっていないと思わざるを得ません。これについてすでに約三千年前に、イスラエルの王であり、世界一の知恵者といわれたソロモンは、次のような警告をしています。

人は長年生きて、ずっと楽しむがよい。だが、やみの日も数多くあることを忘れてはならない。

(伝道者の書11章8節)

長生きをして楽しもうと思つて長生きをして、そこには闇の日、すなわち老いて心身が衰えて苦しみ悲しむ日が多いことを忘れないように、ということでもあります。

もちろん、すべてのお年寄りが今ご紹介した方々のように、お気の毒な状況の中で暮らしてはおられないでしょう。ご家族の愛の中に幸せに暮らしておられる方も少なくないと思います。しかし、たとえそのように幸せに見えるお年寄りであっても、飛躍的に伸びた老年期を長い時間生きなければならぬのです。このような老いの中で、からだの衰え、

頭の衰えを自覚したお年寄りの心の奥にある苦しみ、悲しみ、寂しさは、他人にはなかなかわかることはできません。ましてそのようなお年寄りの心を知って慰め、心の苦しみ、悲しみ、寂しさを取り去って上げることは、もつとも親しい家族ですら難しいのではないのでしょうか。最近わが国では若者の自殺よりも老人の自殺が増加しているという事実も、このことを裏書きしているといってもよいでしょう。私たちはこのようなことから医療にしても、福祉にしても、また家族の介護にしても、人間のできることはお年寄りのほんの外側の部分にしか及ばないことを知るのであります。

### お年寄りの絶望を希望に変えてくださるイエス・キリスト

ではお年寄りはただ絶望するしかないのでしょうか。いや、決して絶望することはありません。人にはできませんが創造主なる神様と神様によつてこの世に遣わされた神のひとり子イエス・キリストが、絶望を希望に、悲しみを喜びに、不安を平安に変えてくださるからです。聖書には主なる神様の次のようなみことばがあります。

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。——主の御告げ。——それはわざわざいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに

将来と希望を与えるためのものだ。

(エレミヤ書29章11節)

ここで神様が「あなたがた」と仰せになっている中には、もちろんお年寄りが含まれています。そして神様はお年寄りにも将来と希望を与えたとおっしゃっています。お年寄りの将来には死が待っているだけだと考えるのが常識ですが、神様はお年寄りにどのような将来をお与えになるご計画をお立てになったのでしょうか。それはこの世における若い先の短い将来ではありません。永遠にわたる将来、すなわち永遠のいのちをお年寄りにお与えになるということです。お年寄りにとって、これほどの希望がほかにあるでしょうか。

しかし神様は、いったいこの計画をどのような形で実行してくださるのでありましょうか。それは神様のひとり子の神イエス・キリストを、貧しい人としてこの世にお遣わしになり、人々の手によって十字架の刑を受けさせ、また三日後に復活させるといふ、まことに驚くべき方法によってでありました。ヨハネの福音書には次のように記されています。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

(ヨハネの福音書3章16節)

預言者イザヤは、神の御子イエス・キリストが父なる神様のご計画を実行されるために人としてこの世にお生まれになるはるか前に、この信じられないような神様のご計画について次のように預言しております。

私たちの聞いたことを、だれが信じたか。主の御腕は、だれに現われたのか。彼は主の前に若枝のように芽生え、砂漠の地から出る根のように育った。彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもない。彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになつた。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かつてな道に向かつて行つた。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。

(イザヤ書53章1〜6節)

私たち人間が病や老い、ひいては死を味わわねばならないのは、私たちが神様に背いて自分勝手な道を歩むという罪の結果なのです。ですから、この罪が始末されなければ永遠のいのちを自分のものとすることはできません。しかし悲しいことに、私たちがこの罪を自分の手で始末することは不可能です。そのことをよくご存じである神様は、私たちの罪をご自分のひとり子イエス様に負わせてくださり、自分の罪を認めイエス様を自分の罪を贖ってくださった方と信じた者に永遠のいのちを与えてくださるのです。イエス様は次のようにおっしゃっています。

まことに、まことに、あなたがたに告げます。信じる者は永遠のいのちを持ちます。

(ヨハネの福音書6章47節)

また次のようにもおっしゃっています。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。

老いの重荷に疲れ果てたお年寄りが、神の御子イエス様の呼びかけに応じて、すなおにイエス様のみもとに行き、イエス様に自分をゆだねたときに、イエス様はそのお年寄りの疲れたましいを新しく生き返らせてくださり、永遠のいのちに生きる希望を与えてくださり、天国までこの世の残された道のりをと共に歩んでくださり、支えてくださり、また背負ってくださいます。神様は次のように約束しておられるからです。

胎内にいる時からなわれており、生まれる前から運ばれた者よ。あなたがたが年をとつても、わたしは同じようにする。あなたがたがしらがになつても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。なお、わたしは運ぼう。わたしは背負つて救い出そう。

(イザヤ書46章3～4節)

ひとたび主に背負われているという幸いな霊的体験を味わった者は、次のダビデのように心から言うことができます。

主は私の羊飼い。私は、乏しいことはありません。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、

私を義の道に導かれます。たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわざを恐れません。あなたが私とともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、私の頭に油をそそいでくださいます。私の杯は、あふれています。まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう。私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。

(詩篇23篇)

イエス様のみもとに行き、イエス様に自分をゆだねたお年寄りが味わう平安、希望はこのようなもののであります。

若き日にあなたの創造者を覚えよ

人間は生まれたときから老化が始まります。しかし生活が豊かでなく、また医学医療の水準が低かった時代には、乳幼児あるいは青年の年頃に、伝染病などの細菌の感染による病気に罹って死亡する人が多かったために、高齢に達するまで生きる人は僅かだったので、今では生まれた男の約五割は八十才まで生存し、また生まれた女の約七割が八十才

まで生存するという時代になったのです。ですから今若いと思つてゐる方も他人事ではなく、やがて気がつくと自分も高齢者になつてゐることになります。このような高齢化時代の対策として私たちはすぐに医療や福祉の充実ということを考えます。しかし、福祉や医療がいくら充実しても、それらによつてお年寄りの心の奥にまで援助の手を差し伸べることができないことは、ごいっしょに見て来た通りであります。私たちはそこに人間のすることの限界を覚えざるを得ません。

人間の心の中に入つてまことの助けを与えてくださることのできる方は、私たちをお造りになり私たちを愛してくださる神様だけであります。ですから高齢化時代を迎えて何よりも大切なことは、私たちが年老いて何もわからなくなる前に、今、自分を造つてくださり、愛してください、平安と、将来と、希望を与えようと手を差し伸べておられるこの神様に顔を向けること、そしてその神様が遣わされた、人となられた神イエス・キリストと出会うことではないでしょうか。私たちはソロモン王の次の警告に心の耳を傾けるべきだと思います。

あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。わざわいの日が来ないうちに。また「何の喜びもない。」と言う年月が近づく前に。太陽と光、月と星が暗くなり、

雨の後にまた雨雲がおおう前に。その日には、家を守る者は震え、力のある男たちは身をかがめ、粉ひき女たちは少なくなつて仕事をやめ、窓からながめている女の目は暗くなる。通りのとびらは閉ざされ、白をひく音も低くなり、人は鳥の声に起き上がり、歌を歌う娘たちはみなうなだれる。彼らはまた高い所を恐れ、道でおびえる。アーモンドの花は咲き、いなごはのろのろ歩き、ふうちようぼくは花を開く。だが、人は永遠の家へと歩いて行き、嘆く者たちが通りを歩き回る。こうしてついに、銀のひもは切れ、金の器は打ち砕かれ、水がめは泉のかたわらで砕かれ、滑車が井戸のそばでこわされる。

(伝道者の書12章1〜6節)

「わざわいの日」とは老年時代を指しています。注意して読みますと、ここには老年の心身の機能の衰えてゆく様子が詳細に記されていることに気づきます。すなわち老年は冬のように暗く、腕は震え、背骨は曲り、歯は抜けて少なくなり、視力は衰え、耳は遠くなつて話し声も聞き取りにくくなり、眠りも浅くなつて小さい音にもすぐに目が覚め、足腰は曲り衰え、ついにいのちを支えている紐は切れ、いのちは終わるといふ意味の内容であります。このような老いの衰えが自分の身の上にどんどん進行するのを日々味わいながら

過ごさなければならぬ老年期は、まさに「わざわいの日」と言つてよいでしょう。

ですから先に救われた私たちは、身近に将来への希望がなく「わざわいの日」の中で悲しんでいるお年寄りがおられたら、手を差し伸ばしてそのお年寄りを招いてくださっているイエス様に心の目を向けることができるように、そしてイエス様によつて「わざわいの日」を「しあわせの日」に変えていただくことができるように祈る必要があります。また自分はまだ年寄りではないからイエス様を信じるのはもっと先でよいと思つている方も、ソロモンの警告を謙虚に受け止め、手遅れになる前に救い主であるイエス様の呼びかけに答えて、イエス様の御前にへりくだることができるようにお祈り致します。最後にパウロの次のみことばをお読みして終わります。

私たちは神とともに働く者として、あなたがたに懇願します。神の恵みをむだに受けないようにしてください。神は言われます。「わたしは、恵みの時にあなたに答え、救いの日にあなたを助けた。」確かに、今は恵みの時、今は救いの日です。

(コリント人への手紙第二 6章1〜2節)



ススキ



■ 著者略歴 ■

重田 定義

1927年東京で生まれる

1950年慶応義塾大学医学専門部卒業

1967年慶応義塾大学助教授 (医学部・衛生学公衆衛生学)

1974年東海大学教授 (医学部・衛生学)

現在東海大学名誉教授 医学博士

著書

『私たちの国籍は天にあります』(やさしい聖書の福音メッセージ集)

『医者に治せない病氣』

『みことばは食べるもの』(わかりやすい福音メッセージ I) 一粒社

『仮の住まいと永遠の住まい』(わかりやすい福音メッセージ II) 一粒社

『私たちはキリストに会った』(わかりやすい福音メッセージ III) 一粒社

本文中の聖句は、日本聖書刊行会「新改訳  
聖書」から引用しています。

新しい天地と古い天地 定價  
(本体286円+税)

1998年7月15日 初版発行 7,000部

著 者 重 田 定 義

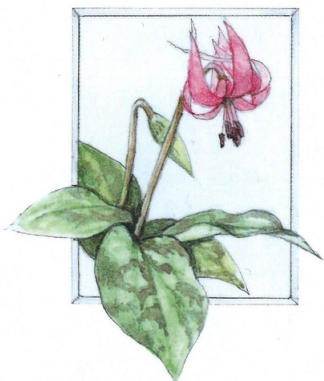
発 行 者 重 田 定 義

〒167-0033 東京都杉並区清水2-8-12

印刷・製本 新 生 宣 教 団

配給・伝販





定価(本体286円+税)